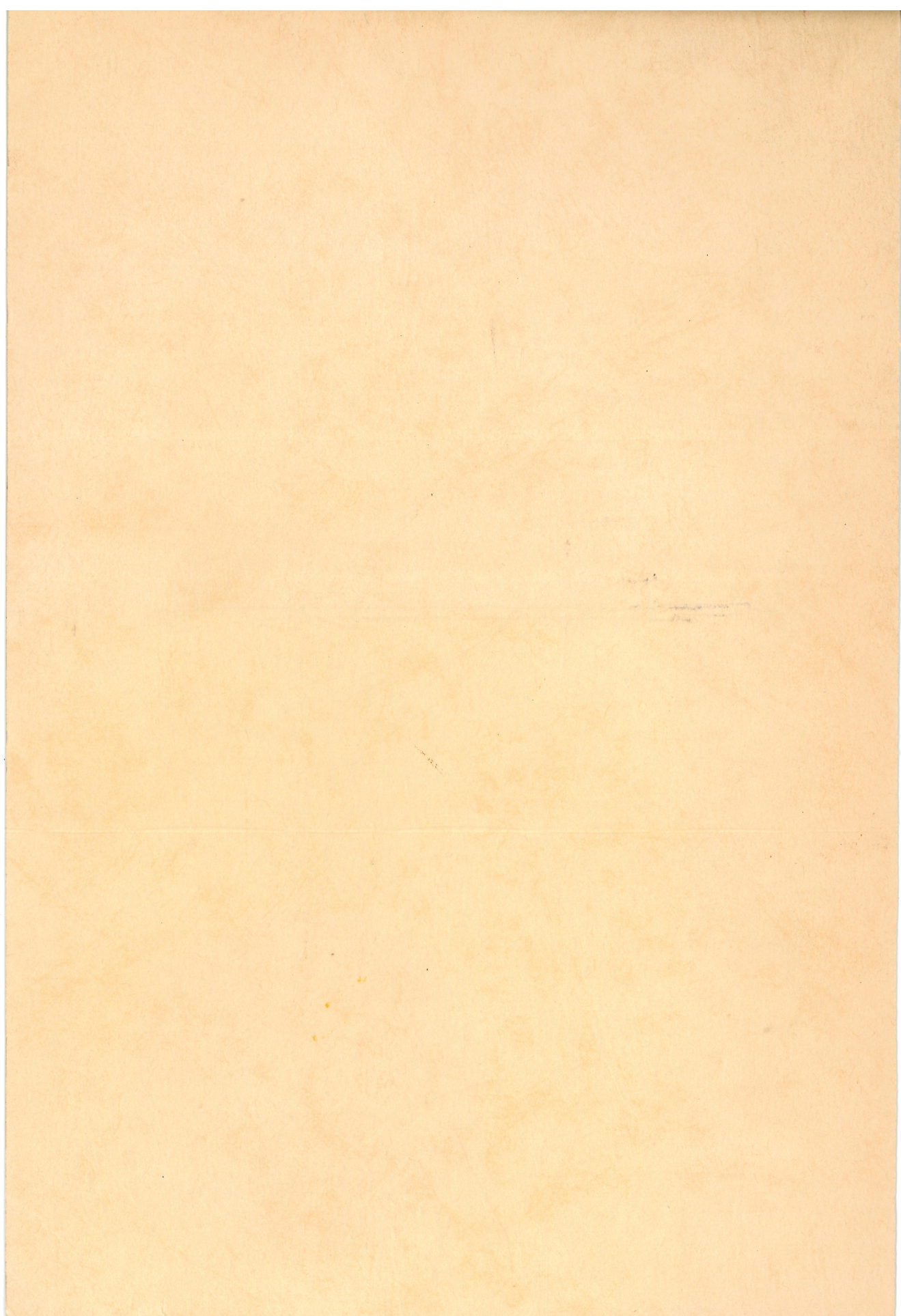


高代山古墳群

1970

掛川市教育委員会



「高代山古墳群」 正 誤 表

頁	行(上から)	誤	正
序 文	14	合せ箱式石棺	合せ式箱式石棺
例 言	3	西向	山合
図版目次	14	第3号墳の	第3号墳は
4	25	葦	葦
5	17	トレンチ縦断の	トレンチ縦断面の
6	34	体埋葬竈基底部	体埋葬墳基底部
7	6	組合せ箱式石	組合せ式箱式石
"	19	5 mm	3 mm
8	27	前後奥壁の影測図	前後奥壁の測図
"	"	石棺測面	石棺側面
9	29	未測のため	未測図のため
10	20	縦断および横断の	縦断面および横断面の
11	図版第12	第3号墳の	第3号墳は
"	22	基地に伺う。	現地に向う。
"	30	縦断および横断を	縦断両および横断面を
13	8	6.5m～7.5m 楕円形	6.5m～7.5m の楕円形
14	8	層序、	層序に
16	20	剥し	剥がし
"	21	あまなく	あまねく
18	1	線が	等高線が
"	28	感じてあった。	感じてであった。
"	32	(長さ3ミリ)が検出された。	(長さ3ミリ・P21図版補1)が…。
20	12	挿図第10)	挿図第10の3)
"	14	挿図第10の(1)は	挿図第10の1は
21	2	挿図第11)	挿図第11の2)
"	4	1.5cmの	1.5mmの
"	11	広根両丸造柳葉式(注1)で、	(註1)削除
"	18	挿図第11の右に	図版第21の(3)の右に
23	4	に続く稜とが	に続く稜線とが
"	14	前方部の幅は	前方部の前端の幅は
24	7	の6は	挿図第14の5は
"	9	の2は	挿図第14の2は
"	11	3 cm	3 mm

頁	行(上から)	誤	正
24	12	挿図第14)	挿図第14の1)
"	24	(註2)	削除
"	30	挿図第15)	挿図第15の14・15)
25	2	挿図第14)	挿図第14の7)
"	5	挿図第14の7は	挿図第14の6は
"	挿図第15 の下余白		註1 後藤守一「上古時代鉄 鍬の年代研究」(前出)
27	2	支丘の墓部	支丘の基部
"	"	2.5cm	2.5m
"	4	隋円形	橢円形
"	5	中央部も	中央部の
"	18	面からの副葬品も	面からは副葬品は
28	4	第2古墳	第2号墳
"	5	第5古墳	第5号墳
"	18	ひどく荒されて	ひどく荒らされて
29	14	子刀1	刀子1
"	24	第3墳	第3号墳
"	25	銚	鉄銚
"	29	被葬者であった	被葬者が幼少であった
30	14	同根の	同等の
32	15	孤立1基のみ	孤立して1基のみ
"	23	記したごとくであるが、	記したごとくである。
34	6	少なからぬ後	少なからぬ数
"	11	太田川以西	太田川以東
35	3	志賀高穴穀朝	志賀高穴穂朝
"	8	山名郡努郷の「久努と	山名郡久努の「久努」と
36	23	(701)年以前	(701年)以前

高代山古墳群

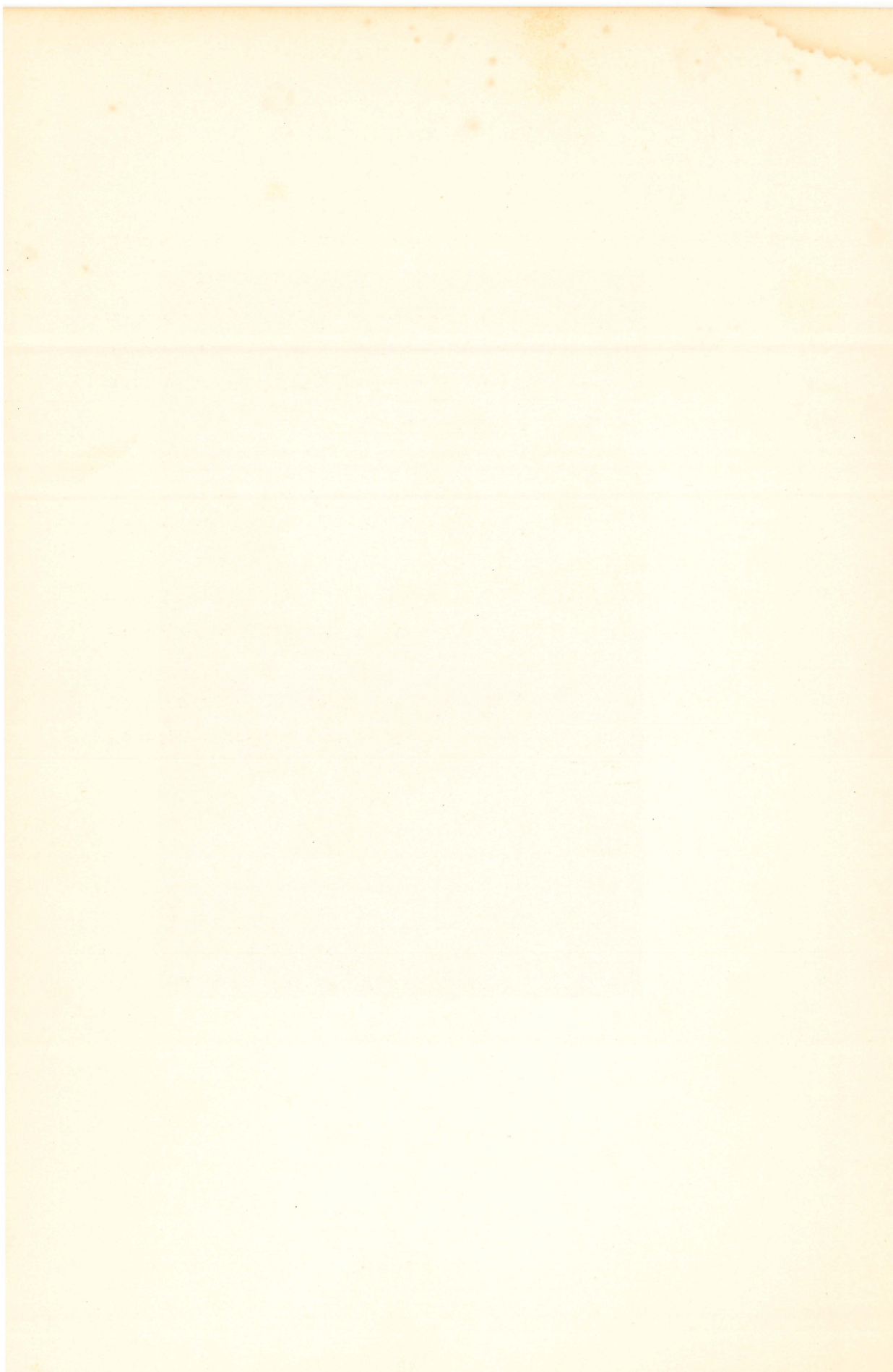
掛川市教育委員会

陸家山房

全書卷之四



高代山第3号墳の石棺内部



序 文

経済の高度成長に伴う市域の変貌は目まぐるしく、真に目を見張るものがあります。

当市における工場誘致、宅地造成、農業構造改善事業は、日を追って進められ、古墳に波及する恐れのある今日、その発掘と保護の急なることを痛感する切なるものがあります。

わが掛川市は、東海道沿線に位置し立地条件に恵まれ原野谷川を抱いて四季温暖、農作に適し、その中に古人の生活を基とした文化が生れ育ち、いま古人の貴重な文化遺産として数多くの古墳を見出すことができます。これらはすべて歴史につながる貴重な遺跡であり、万人の宝として保存すべきものであります。

今回教育委員会において、シェル化学株式会社の工場建設に伴う高代山古墳群の発掘と保存を計画した処、幸にも日本考古学協会会員久永春男先生の献身的な御指導と御教示を頂き、地元有志の方々および市文化財審議委員、同調査員、学校関係、その他大勢の方達の御理解と御協力を賜わり、調査を完遂できたことを深く感謝申し上げる次第であります。

高代山古墳群は、円墳および前方後円墳で特に第3号墳と名付けた円墳は、小規模ながら組合せ箱式石棺を蔵し、出土品には大刀、剣、鉄鏃等が埋葬され、被葬者は豪族の血縁関係の者と推察されます。

われわれはこの貴重な体験を生かし、郷土の文化財として、古墳の保存に万全を期し、ここに一書を刊行して、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、研究者の参考になれば幸であります。

昭和46年3月31日

掛 川 市 教 育 委 員 会

教育長 山 内 監 一

例 言

1. 本書は、昭和44年12月22日～30日、昭和45年1月11日～2月11日にわたって、掛川市教育委員会が発掘調査した、掛川市細谷字西向の高代山古墳群の調査報告書である。
2. 本書の題名は、掛川市長、榛葉虎之助の揮毫による。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

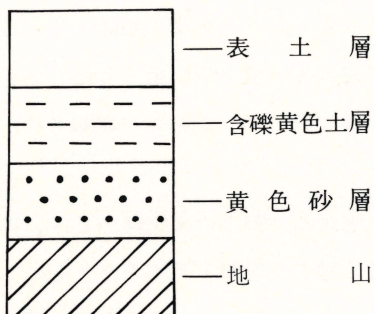
第1章 久永春男・久保田久男

第2章 掛川市教育委員会

第3章～第9章 久永春男

4. 本書に掲載の写真は、松原尚夫、久永春男、松本敏春の撮影による。
5. 遺物の実測図の作成は、久永直見氏をわずらわした。
6. 本書の編集は、久永春男と掛川市教育委員会が行なった。
7. 挿図における断面の

層序の記号および呼称
は右のとおりである。



高代山古墳群

目 次

序 文

例 言

第1章	高代山古墳群の位置と地形	1
第2章	調査の経過	3
	1 はじめに	3
	2 測量調査	4
	3 発掘調査日誌	5
第3章	高代山第1号墳	13
第4章	高代山第2号墳	15
第5章	高代山第3号墳	17
第6章	高代山第4号墳	22
第7章	高代山第5号墳	26
第8章	高代山古墳群の築造年代と性格	28
第9章	高代山古墳群の歴史的背景	34

図 版 目 次

巻頭図版 高代山第3号墳の石棺内部

図版第1	第2号墳の測量	4
図版第2	第2号墳のトレンチを測量	5
図版第3	第5号墳の発掘調査	5
図版第4	第1号墳の発掘調査	6
図版第5	北風の中で(左より第3号墳・第1号墳・第2号墳)	7
図版第6	第3号墳の石棺の蓋石が現われ始めた	7
図版第7	第3号墳の石棺の蓋は7枚並んでいた	7
図版第8	第3号墳の被葬者は身長155cm前後ではなかろうか	8
図版第9	第4号墳の墳丘の中軸線と墳裾の発掘を開始	9
図版第10	第4号墳の墳裾(東側)の発掘	9
図版第11	第4号墳の後円部の内部施設は盗掘で攪乱されている	10
図版第12	第3号墳の岩盤を長方形に掘り込んで石棺が埋込まれていた	11
図版第13	発掘を終わって	11
図版第14	高代山古墳群の全景	37
	(1) 原野谷川沖積地の真中にある残丘・高代山	
	(2) 真上から見た高代山古墳群	
図版第15	高代山第1号墳の調査	39
	(1) 第1号墳の墳丘(西南から)	
	(2) 木棺を納めた岩盤の掘込	
図版第16	高代山第2号墳の調査	41
	(1) 第2号墳の墳丘	
	(2) 第2号墳の発掘区	
図版第17	高代山第2号墳の調査	43
	(1) 木棺を納めた岩盤の掘込	
	(2) 第1号墳と第2号墳との中間地点のトレンチ	
図版第18	高代山第3号墳の調査	45
	(1) 第3号墳の墳丘	
	(2) 石棺の蓋石の列(東から)	
図版第19	高代山第3号墳の調査	47
	(1) 石棺の内部(南から)	
	(2) 石棺の内部(北から)	
図版第20	高代山第3号墳の調査	49

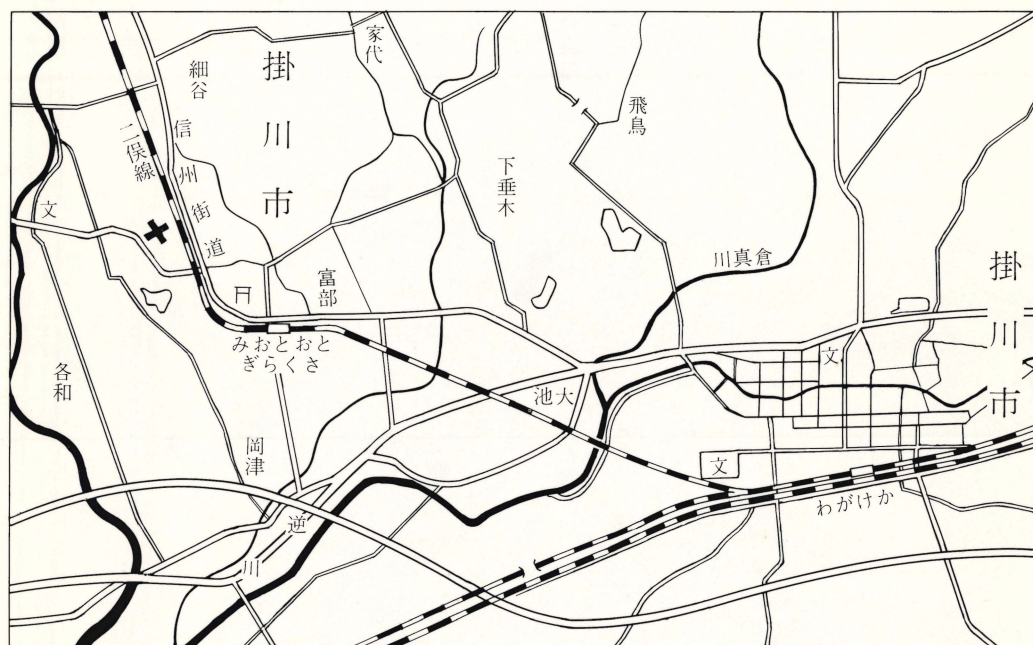
(1) 石棺の西側壁	
(2) 石棺の東側壁	
(3) 石棺の北壁	
(4) 石棺の南壁	
図版第21 高代山第3号墳の調査	51
(1) 剣と大刀	
(2) 刀子	
(3) 鉄鏃	
図版第22 高代山第4号墳の調査	53
(1) 第4号墳の墳丘（西から）	
(2) 墳丘のトレンチ	
図版第23 高代山第4号墳の調査	55
(1) 後円部中央の岩盤に石棺を納める掘込（南から）	
(2) 後円部墳頂のトレンチ（南から）	
図版第24 高代山第4号墳の調査	57
(1) 墳裾の調査（前方部東側）	
(2) 墳裾の調査（後円部北側）	
(3) 鉄鏃と石棺の残存側壁	
(4) 鉄鏃出土	
図版第25 高代山第4号墳の調査	59
(1) 第4号墳出土の鉄鏃	
(2) 第4号墳出土の鉄鏃	
図版第26 高代山第4号墳	61
(1) 鉄鉾	
(2) 大刀と剣の残欠	
(3) 工具	
(4) 鉄針	
(5) 須恵器片	
図版第27 高代山第5号墳の調査	63
(1) 第5号墳墳丘（南から）	
(2) 第5号墳遠影（西北から）	
図版第28 高代山第5号墳	65
(1) 墳丘の発掘区	
(2) 残く岩盤を掘込んでの木棺を裾えた跡	

挿 図 目 次

挿図第1	高代山古墳群の位置	1
挿図第2	高代山古墳群分布図	2
挿図第3	高代山古墳群付近地籍図	3
挿図第4	第1号墳墳丘平面図および断面図	13
挿図第5	第1号墳埋葬墳平面図および断面図	14
挿図第6	第2号墳墳丘平面図および断面図	15
挿図第7	第2号墳埋葬墳平面図および断面図	16
挿図第8	第3号墳墳丘平面図および断面図	17
挿図第9	第3号墳の組合わせ式箱式石棺平面図および断面図	19
挿図第10	第3号墳石棺内出土の剣と大刀	20
挿図第11	第3号墳石棺内出土の刀子・鉄鏃	21
挿図第12	第4号墳墳丘平面図および断面図	22
挿図第13	第4号墳埋葬墳平面図および断面図	23
挿図第14	第4号墳埋葬墳内出土の鉄鉾・剣・大刀・工具類	24
挿図第15	第4号墳出土の鉄鏃と針	25
挿図第16	第5号墳墳丘平面図および断面図	26
挿図第17	第5号墳埋葬墳平面図および断面図	27
付載挿図1	掛川市域の前方後円墳一覧表	31

第1章 高代山古墳群の位置と地形

掛川市を東西に貫通する国道1号線が、市街地を西にはずれようとする二瀬川町地内の大池橋交差点で、県道掛川～天竜線が西北西へ分岐している。この県道を西北西へ約4km進むと、国鉄二俣線の遠江桜木駅前広場に接するが、これよりさらに600m程北上すると、県道掛川～山梨線との交差点がある。ここで西方へ折れると、二俣線の踏切りがあり、これを越えて約400m程西北へ進むと、東方約100m幅の水田を隔てて、ちょうど県道掛川～山梨線と掛川～天竜線との中間の位置に南北に延びる独立丘陵が在る。

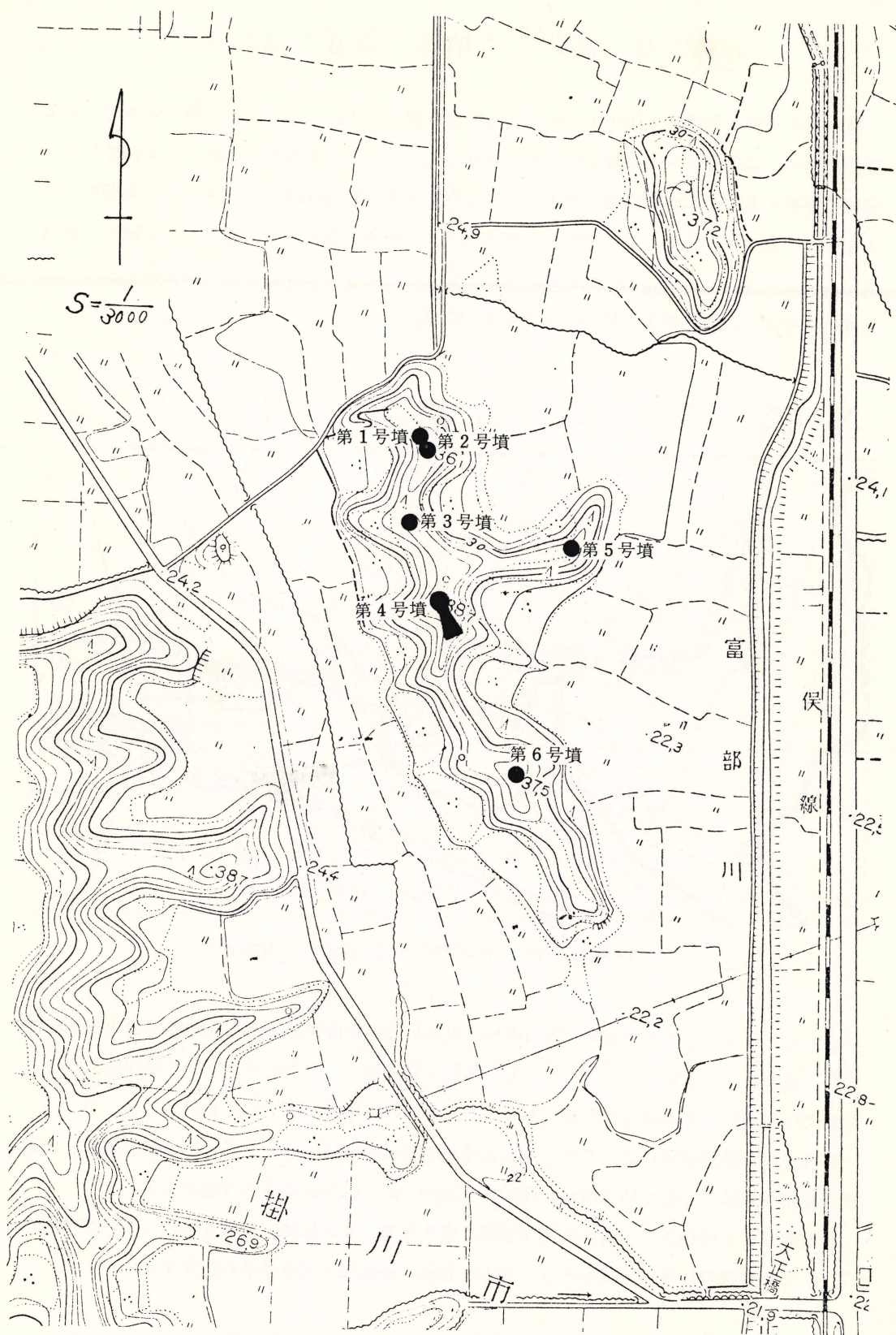


挿図第 1 高代山古墳群の位置 (縮尺 1 : 50000)

このあたりは、もとの原谷村、和田岡村、桜木村三村の境界にあたり、地籍は掛川市細谷字山合に属するが、通称、高代山と称する。西側は県道掛川～山梨線を挟んで、岡津原独立丘の北端部に近接し、その西方および北方には、一面に水田地帯が開けている。

高代山は、原野谷川によってつくられた沖積平野の中の残丘で、「卜」の字形を呈し、北北西～南南東に延びる長さ約 300m、幅30m～60m、高さ約38mの独立丘陵である。

古墳群はこの稜線上に、北から第1号墳、第2号墳、第3号墳、第4号墳、「ト」の字形の「、」の先端頂部に第5号墳があり、さらに丘陵の南端部に第6号墳が位置する。



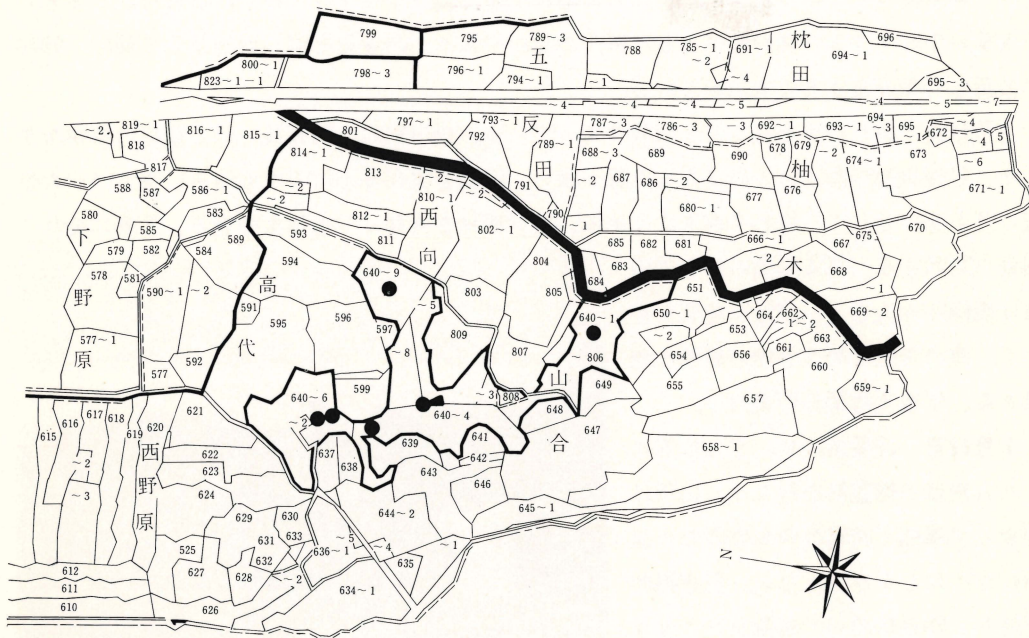
挿図第2 高代山古墳群分布図 (縮尺 1 : 3000)

第2章 調査の経過

1. はじめに

昭和44年12月6日、シェル化学株式会社の掛川工場建設用地として選定された掛川市細谷字山合地内の4950㎡の中央にある高代山に古墳群が存在するため、静岡県教育委員会社会教育課に連絡して、協力を求め、現地踏査を実施したところ、一部に最近の盗掘跡を発見した。急ぎ発掘調査の必要を認め、土地所有者シェル化学株式会社と協議した結果、出土品はすべて掛川市が保管すること、最南端の一基は現状で保存することの諒解を得て、県内の関係方面に対し、発掘調査を依頼したが、年末の事として協力が得られず、止むなく会社側に工事延期方を申し入れたが、用地内に古墳の存在は予期しなかったことでもあり、明年6月の操業を目指して建設計画が確定しているため、変更は不可能である旨の回答であった。このため、市は静岡県教育委員会社会教育課に対し係官の派遣を再度要請、現地踏査の上、種々協議を重ねた結果、県の紹介により調査に必要な人員は市職員を動員することを条件として、日本考古学会々員久永春男氏に発掘調査担当を依頼することに決まり、その承諾を得た。

早速、下刈り作業に着手するとともに、寒風吹きすさぶ師走の29日30日と明けて1月11日・12日の4日間にわたり墳丘測量を実施した。昭和45年1月6日付委保第5の4号にて、文化庁より発掘調査の承認を受け、1月中旬から2月中旬にかけて、延べ23日間にわたり発掘調査を実施した。



挿図第3 高代山古墳群付近地籍図（縮尺1：4400）

2. 測 量 調 査

12月22日 年末のあわただしいさなか、久永先生を迎えて現地踏査を行なう。この日風強く古墳のある独立丘陵のいただきは強風にあおられ、足もとも危い。1基ずつ慎重に検討する。

その結果、高代山古墳群はこれまで円墳5基とされて来たが、実際は円墳5基と前方後円墳の疑いあるもの1基、あわせて6基であることがあきらかとなった。

踏査終了後、久永先生を囲んで、発掘調査についての詳細な打合せをする。寒風肌を刺す師走の29日と30日、明けて1月の11日と12の4日間、測量を行なうことにした。

調査員 久永春男（主任） 住吉政康 久永直見

助手（市職員） 大浦健一 内藤次郎 久保田久男 伊地知豊 松浦金作 松本敏春

長尾秀雄 小沢豊久 杉山堅一 田辺 兼男 榛葉 仁 田辺 明 永田夫美子

12月29日 午前10時45分、調査員一行は掛川駅に到着、ただちに測量班を編成し現地へ向う。この日北西の風強く測量条件はきびしい。2班に分かれて北から南へ順次名付けた第1号墳と第2号墳の測量を開始する。馴れぬ手に箱尺を握って古墳の周囲を走り廻る。寒さや風が吹きつける砂にもしだいに馴れて、平板上に展開されて行く曲線を見ながら、古墳に眠る人々の往事の生活を想像する。午後4時測量を終り、調査員を宿舎へ案内する。

12月30日 午前9時、現地へ向う。空は真青く気持ちよく晴れているが、山頂の風は昨日にも増して強く寒気が厳しい。昨日の経験を生かして一同防寒服の頭巾をかぶり、防塵マスクを着用し、一見誰やらわからない。今日は第3号墳と第5号墳の測量をおこなう。東へつき出た支丘上にある第5号墳は木をすっかり伐採して風をさえぎる物もなく、強風は砂塵をまいて襲う。一瞬目も口もあけられない。しだいに馴れて予定通り午後4時に終了。器材を取りまとめて天幕の中ですす一杯の茶はまさに蘇生の思いである。調査員を駅へお送りして帰庁。1970年の新しい年がもうそこまで来ている。

1月11日 新しい年を迎えて一同張り切っている。掛川駅頭で調査員一行と新年の挨拶をすませ、早速現地へ向う。この日もまた風が強い。田圃を流れる小川の水も淀み、凍りついた岸辺の葦も寒々として、思わず首をすくめる。重い器材を背負って山頂まで登る。2班に分れて測量を開始する。第4号墳の前方後円墳は規模やや大きく、測量に時間がかかる。他の1班は第5号墳の周囲を測量する、午後4時30分作業終了。

1月12日 測量最終日。本日仏式により古墳群の慰霊祭を行なう。山頂は相変わらず風強く読経の声も風のため途切れがちにしかきこえない。記念撮影を終り、昨日に読んで測量をおこなう。第4号墳、第5号墳の測量を終了する。



図版第1 第2号墳を測量

3. 発掘調査日誌

1月16日 (金) 快晴 北西の風、温度 5.8℃、湿度47%。天気はよいが風の冷たい一日。特に太陽が低くなると寒さが身にしみて、手や顔が痛くなるほどであった。

本日より発掘作業開始。調査担当は久永春男氏、夏目恒四郎氏、松原尚夫氏の3名。参加者は市役所職員7名、作業員12名である。午前中作業に必要な道具を運搬する。

作業員12名は内藤係長の指揮のもとで午前中テント張り、清掃作業を行なう。午後より作業班を2班に分けて発掘作業にかかる。

第2号墳には幅1mの東西トレンチを設定し、第5号墳には幅1mの南北トレンチを設定して発掘を開始する。第2号墳、第5号墳とも墳丘の表面下約50cmの深さまで掘り下げる。

準備に、作業に、初めてのことで、まごつくことの多い一日だった。

1月17日 (土) 晴れ 北西の風、温度 5.6℃、湿度50%。作業開始前に、作業のすすめ方について打合せを行なう。第2号墳、第5号墳ともに墳頂にそれぞれ東西に2mないし3mを残し、墳丘の裾に向かって20cmほどの落ちこみで岩盤が続くことを確認する。第5号墳は午前中に南北に設定したトレンチ内の黒土層を追究。午後からトレンチ縦断の測図。トレンチおよび東西に間壁を残して扇形に発掘する。

昨日と同様寒風が強く、身体のコまで冷え切ってしまう。指先等の感覚が鈍くなって作業が予定より遅れがちになる。

1月18日 (日) 晴れ 北西の風強し、温度 6.1℃、湿度42%。作業は第2号墳、第5号墳の2班に分けて行なう。

第2号墳は久永先生の指導でトレンチ内および間壁を残した扇形部分の岩盤追究と東西トレンチ北壁の断面を測図。



図版第2 第2号墳のトレンチを測量



図版第3 第5号墳の発掘開始

第5号墳は夏目先生の指導で南北トレンチと扇形に4面を掘り進む。南北トレンチ東壁の断面とトレンチ東側の南壁断面の測量を行ない、発掘作業を続行する。

樹木を伐採された山は第3紀層の砂層が露出し、北西風が強く砂塵が目に入って涙ばかり出る。下半身が特に冷えこむ。人夫の人達の仕事が先ばかり急いで乱雑で困るとの注意を受けた。特に男の人達にその傾向が強い。

1月19日（月）曇り 温度6℃、湿度44%。曇天ではあるが風のない静かな一日。連日の強風で目に塵が入り、痛くてたまらないとの話があり、眼科にゆかねばならぬメンバーも出たため、防塵メガネとマスクが支給されたが、あいにく今日の天候では必要がなく、役立たずと皆で笑う。

第2号墳は平板測量のあと櫓を組んで写真撮影の後、東西トレンチの延長部の断面を測図する。終了後打ち水をする。

第1号墳、第3号墳、第4号墳は墳丘の除草作業を行なう。

第5号墳は南北トレンチの東側間壁の北側断面図と西側間壁の北側断面図およびトレンチ東壁面の実測図を作成した後、引き続き発掘作業を行なう。

本日夏目恒二郎先生が心臓発作のため入院された。寒さのために発作が起きたとの事である。

1月20日（火）晴れ 今日は風もなく快晴。作業も順調に進む。

第5号墳は南北トレンチ東側間壁の表土下15cmほどの位置から割石積みと小砂利とが出る。周囲は一面の砂利混り層。それを測図した後に間壁を全部除去し、石をとり上げる。引き続いて全面に渡る発掘を進める。表土から40cmの深さで黒土層となる。さらに追究してその黒土層がほぼ円形に分布することを確認する。間壁除去後黒土層に打ち水して作業終了。

1月21日（水） 発掘作業を休む。

1月22日（金） 晴れ 西北の風強し。吹きすさぶ風は砂塵をとばし、作業を阻む。

第2号墳はトレンチの掘下げ作業を続行、棺体埋置部の追究を始める。

第5号墳は南北トレンチの掘下げを行ない、作業を続行。途中トレンチ中央より北へ110cmの位置で土器片を発見する。第5号墳は中央部から北側の部分にかけて細かい砂土が分布する。

1月23日（金）曇りのち晴れ、午後西風強し、温度5.1℃、湿度47%。本日より入院された夏目先生に代って牧野彦一先生が調査員として参加。寒さは厳しくないが風が強い。吹きつける砂塵が音をたてて防寒服を叩く。

第1号墳は幅1mの東西トレンチを設定、発掘作業にかかる。

第2号墳は松原先生の指揮で棺体埋葬拵基底部の探究作業を行なう。

第3号墳は幅約1.3mの東西、



図版第4 第1号墳の発掘開始

南北両トレンチを十字形に設定。
発掘作業にかかる。午後南北ト
レンチの発掘作業中、墳頂部に穴の
様な個所を発見。牧野先生の指示
で東側に約25cm拡幅したところ、
竪穴式石室または組合わせ箱式石
棺らしき蓋石を発見する。

表土より約25cmの位置である。
蓋石上部の土を取り除く作業を行
なう。

1月24日 晴れ 西の風、温度

6℃、湿度47%。町は静かな朝である。山はどうかと思いつつ現地に向かう。

第1号墳はトレンチ内の発掘作業を続行する。棺体埋葬部と思われる個所の測図をして岩盤の掘り込みの追究に移る。

第3号墳は石棺上面の平板測量と写真撮影後、蓋石をとり上げる。午後から石棺内の精密発掘を行なう。南端50cmの石室の東側から金属片らしきものの一片が発見される。よく見ると銀地に金箔を施した物で、大きさは5mm程度の小さなものである。

第4号墳は午後から墳丘下部周囲の表土剥ぎ作業を行なう。

午後県庁から若松文化財係長と池谷主事が来観。

1月25日 (日) 晴れ 西の風、温度6℃、湿度69%。午前中少々風あるも、午後から静かになる。

第1、第2号墳は棺体埋葬墳基底部と思われる個所の岩盤の追究を行なう。断面を追加測図する。

第3号墳は午前10時30分に棺底部から石棺中軸線と平行に剣1口、大刀2口、刀子1口、鉄鏃2点が現れた。原形をはっきり出し、写真を撮影し、平板測量を行ない、レベルを測って後、午後遺物のと



図版第5 北風の中で(左より第3号墳・第1号墳・第5号墳)



図版第6 第3号墳の石棺の蓋石が現われ始めた



図版第7 第3号墳の石棺の蓋は7枚並んでいた

り上げ作業を行なう。大刀はやや内ぞりで漢代以来の古式のおもかげを残した作柄であるとのこと。

1月26日（月） 晴れ 西の風少々、温度 6.2℃、湿度62%。珍らしく風の無い暖かい一日。遠く望む山山は雪を頂いて青い空の中に美しい。朝は霜で一面まっ白で寒かったが、おかげで日中は穏かだった。

第1、第2号墳は昨日に引き続き埋葬壇基底部の岩盤の追究を行なう。第1号墳はほぼ南北に、第2号墳も南北に棺体が納められていたらしいとのこと。第1、第2号墳ともに清掃を行ない、写真撮影をする。次いで第1号墳のみ平板測量をし、作業を終了する。

第3号墳は石棺床面の精掘の後、レベルをはかり、写真撮影を行なう。除去土中より刀装具の破片らしきものが発見される。

第4号墳は側面からの写真を撮影。

夏目先生本日退院、帰宅に際して再び現地にみえ、第5号墳に心を残されて元気に帰宅される。

本日は作業人夫休みのため、職員と調査員とで作業を行なう。

1月27日（火） 晴れ 温度 5.9℃、湿度53%。第1号墳は棺埋葬壇断面の測量後、復元作業を行なって調査を終了する。

第2号墳は埋葬壇の平板測量を行ない断面を測図する。

第3号墳は東西、南北両トレンチの平板測量。石棺床面および石棺壁石の横断面を測図後、写真撮影をして調査を終了。

第5号墳は残存部分（東西トレンチ南側）の黒褐色土層の追究作業を行なう。

松原先生は午後より自宅にて写真整理作業のため、帰宅。

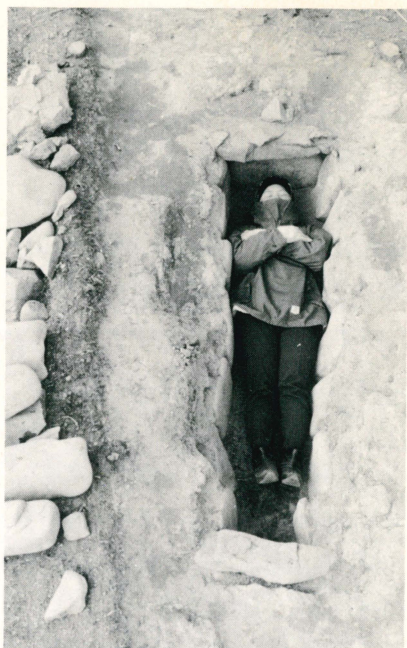
1月28日（水） 曇り 西の風、温度 6.1℃、湿度61%。

第3号墳は石棺の前後奥壁の影測図、および石棺測面の石ならびの測図（石室内東測面のみ）と東西トレンチの縦断面を測量。

第5号墳は棺体埋葬壇の基底部の追究作業。

1月29日（木） 晴れ 本日は作業を休む。午後から見学の申し込みが多数あったため、久保田課長が現地に出向き説明を行なう。松浦主事応援。（見学者）第二小学校5～6年生約百名、東中学校、三笠中学校、原谷小学校、和田岡小学校の教諭35名、原野谷中学校の教諭と生徒18名。一般市民50名。

1月30日（金） 雨 本日も作業を休む。夜半より久かたぶりの降雨あり、石棺内や埋葬壇底に水がたまらぬかと心配する。



図版第8 第3号墳の被葬者は身長155cm前後ではなかろうか

1月31日（土）晴れ 風強し。昨夜の雨は小型台風の仕業であった。今日は朝から寒風が吹き荒れ、厳しい寒さである。心配していた雨も、第3号墳の石棺へは TENT を上部に張っておいたので浸水していなかった。

第4号墳は作業員を全員投入して調査開始。後円部に東西トレンチおよび前方部につながる南北トレンチを設定し、発掘を始める。

第5号墳の黒土層中より土師器片が出土する。静岡県庁より大石教育次長、若松文化財係長の視察があったが寒風のため短時間で引きあげられた。

森高等学校郷土史研究部生徒8名見学に来る。

2月1日（日）晴れ 強風、温度 6.2℃、湿度22%。午前中第4号墳、第5号墳の作業を行ったが、強風のため、足の運びが自由にならず、作業員には1時間毎に休憩をとらせて作業を続行したが、危険も伴うと思われるので午前中にて中止。午後調査員と市の職員5名にて宿舎にて写真の整理および文化庁へ提出する報告書の原稿作成に従事する。午後6時終了。

浜名高等学校郷土史研究部生徒3名見学。

2月2日（月）晴れ 北西の風、温度 7.7℃、湿度21%。昨日に引き続き本日も風強し。心配された天幕はどうやら昨日人夫の人達の手をかりて縄かけしたので吹き飛ばされず、強風にあおられてバタバタと音をたててやかましい。

第3号墳は石室西側の石の平面が未測のため本日行なう予定であったが、風のため作業が不可能で中止した。

第4号墳は墳頂に TENT で風よけを作って発掘作業に従事したが、今にも杭が抜けて飛びそうな危険な状態であるので、作業はトレンチの追完作業。午後後円部の頂きの十字形トレンチのほぼ中央部から刀の破片と柄頭の破片と思われるものが重なって出土する。扁平な川石の出土位置と小石多数出土により盗掘されていることがほぼ確実となった。



図版第9 第4号墳の墳丘の中軸線と墳裾の発掘を開始



図版第10 第4号墳の墳裾（東側）の発掘

2月3日（火） 晴れ 西の風、
温度 4.4℃、湿度49%。午前中少
少風あり、午後になってさらに強
まる。

第3号墳は写真撮影をしたが寒
風に邪魔をされて、手先がかじか
み、なかなかシャッターが切れな
い状態だった。

第4号墳は盗掘坑と思われる個
所の追究作業。午後、後円部の黒
土層中より鉄片、鉄鏃、小石多数
が出土。相当以前に盗掘されてい
たものと判断された。

第5号墳はトレンチ断面を追究
測図。東中学校教諭数名見学。

2月4日（水） 晴れ 西の風、温度 6.3℃、湿度47%。第1号墳、第2号墳は航空写真撮影
にそなえて埋葬墳の清掃作業を行なう。

第3号墳は写真撮影をする。

第4号墳は昨日に引き続き、後円部盗掘坑の岩盤追究作業。前方部に続くトレンチの横に不
審な個所を見つけ、その追究と縦断および横断の測図をする。

第5号墳は午後から平板測量を行なう。

2月5日（木） 晴れ 西の風、朝より終日寒風強し。連日の寒さで、調査員も助手も全員に
疲労の色が見られる。

第1号墳、第2号墳、第5号墳は航空写真にそなえて作業員全員にて埋葬墳の復元作業に従
事する。全て終了。

第4号墳は引き続き発掘作業を行なう。鉄片・鉄鏃等、次々と出土品あり。午後から後円部
東西トレンチの断面を測図したが強風のため、吹き飛ばされそうで困難を極めた。

2月6日（金） 晴れ 西の風、温度 2.7℃、湿度42%。本日は欠勤者が多く、調査員と市職
員のみの作業のため、測量班として土地改良課に人員の動員を依頼し、作業を続行するという
大変忙しい日だった。

第4号墳は午前中墳丘周囲の裾の発掘区の平板測量を行なう。後円部の中心点付近の作業は
引き続き埋葬墳の追究。午前中に幅3cm、長さ4cm位の須恵器片が出土、鉄鏃も多数出土する。

第3号墳は強風のため測図ができず残してあった石棺西側の石並びの測図を行なう。



図版第11 第4号墳の後円部の内部施設は盗掘で損乱さ
れている

2月7日(土) 晴れ時々曇り 西の風、温度5.6℃、湿度35%。第4号墳は埋葬壇の平面、断面の測図を全員にて続ける。東中学校生徒50名見学。

2月8日(日) 雨 雨のため発掘作業は中止。久永・牧野両先生と松本の3名で午前中出土品の整理を行なう。午後原田の仲屋氏宅をたずね、仲屋氏所蔵の出土品の分類作業に従事する。

2月9日(月) 晴れ 西の風、温度5.2℃、湿度47%。

第3号墳は写真撮影。松本が高さ5mの櫓を組んで撮影する。強風のため櫓上で手がかじかんでなかなかピントが合わず、シャッターが切れず大苦勞をした。

第4号墳は午前中航空写真にそなえて後円部の整理をしたが、強風のため撮影中止との連絡があった。午後4号墳東側裾部分の断面測量。第5号墳の南側墳裾のレベルと第1号墳、第2号墳中間部のレベル測量。

2月10日(火) 晴れ 西北の風、本日も昨日同様に強風のため航空撮影は無理かと思われたが、今日飛行してもらわないと予定が狂うため、静浜司令部に連絡、当方の準備体制と作業計画を話し依頼したところ直ちに準備するとの返事を頂く。

午前9時25分撮影準備に必要な人員を擁し、基地に伺う。10時15分自衛隊機到着、東西南北各方向よりそれぞれ5回にわたり撮影を行なう。10時35分撮影全て終了。飛行機は帰路についた。午後から作業員全員を招集し、全古墳の盛土部分の除去作業を行ない、封土内の遺物の検出につとめたが、皆無であった。

2月11日(水) 晴れ 北西の風が少しあるが、暖かい一日。

第3号墳は午前中石棺の全ての石を除去し、写真撮影を行なう。ついで平板測量を行ない、縦断および横断を測図、現場の確認ができる様な状態に必要箇所を残し、他を除去する。

第4号墳は後円部の埋葬壇を清掃中、11時45分埋葬壇の外縁東寄りのところ



図版第12 第3号墳の岩盤を長方形に掘り込んで石棺が埋込まれていた



図版第13 発掘を終わって

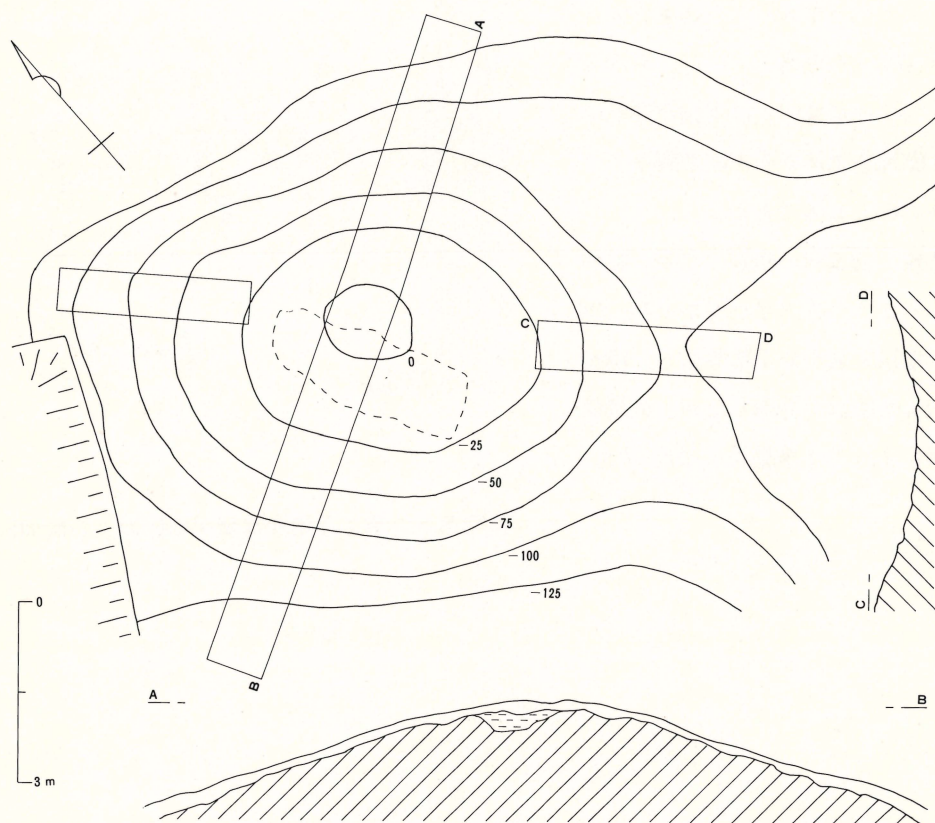
より鉄鉾一個を発見。位置記録、写真撮影後慎重に取り上げる。午後残部の清掃作業を行ない終了した。

本日で発掘作業を全て終了。午後 3 時から内藤係長宅において調査員・作業員全員で解散式を行なった。

第3章 高代山 第1号墳

位置 高代山は「ト」の字形を呈して、北西—東南方向に中軸線をおいて横たわっているが、その中央より少し北寄りの地点からトのノミにあたる支丘が東北東へ直角に近く分岐している。第1号墳はその中軸線の北端に近い、標高36mの尾根上に築かれている。(挿図第2)

墳丘 (図版第15(1)、挿図第4) 墳丘は尾根の稜線上に地山の高まりを利用して築かれているので、その稜線の方角すなわち北西側と南東側とには封土の流れ土がたまり、それと直角の方角、北東側と南西側は馬の背のような斜面を崩れた封土が流れ落ちてしまっていて、現存する墳丘は北西南東軸の径約9.2m、谷に挟まれた北東—南西軸の径の6.5m~7.5m楕円形を呈し、高さは75cmないし1mとみなされた。南南東に占地する第2号墳との間隔は、表土においては0.4mであったが、トレンチを掘って(図版第15(1))復原してみると1.5mとなった。



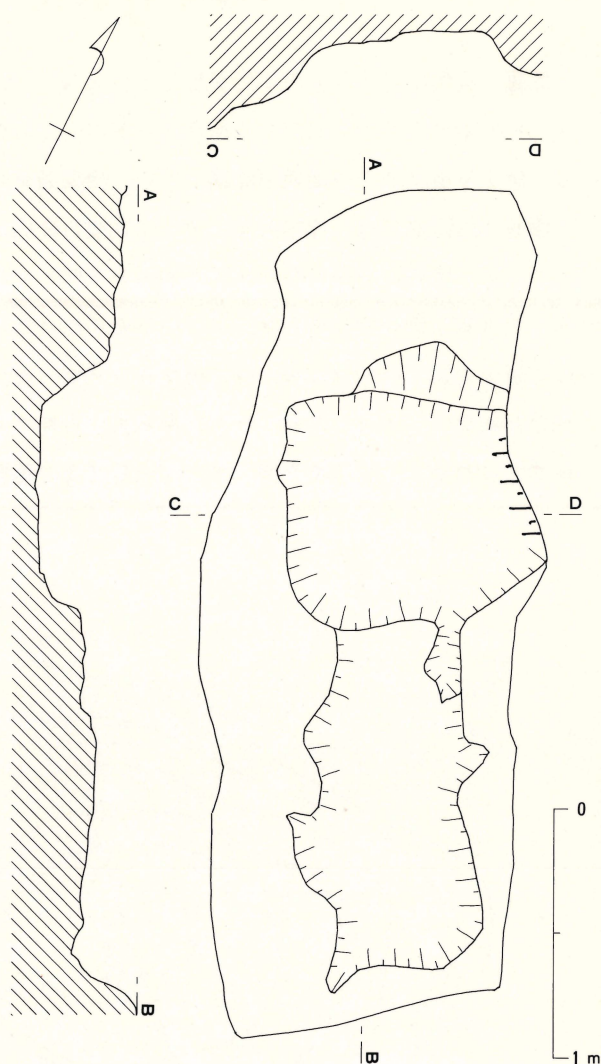
挿図第4 第1号墳墳丘平面図および断面図

内部構造（図版第15(2)、挿図第5）

墳頂部においては表土下22cmに泥板岩の岩盤を振下げて埋葬施設が営まれていた。施設は墳頂部のほぼ中央に位置し、北北西～南南東を長軸とする長さ3.4m、幅約1mの不整な長方形で、深さは約25cmを測る墓壇で、四壁も底面も脆い岩盤の層序、したがってはなはだしく凸凹していたが、底面は砂質土で均されていた。そこに木棺を安置したものと推定される。

墓壇内には岩盤を抉った際に生じたであろう多量の小形角礫を含んだ褐色有機土が埋積していた。おそらくかつては墓壇内には木棺が安置され含礫褐色土はその上面を蔽って推積されたものであろう。

遺物 墓壇内は精査したが、副葬品は何ひとつ検出されなかった。次いで墳頂の表土を全部除去し、墳丘の裾もあまねく発掘したが、供献品の類もまったく発見されなかった。



挿図第5 第1号墳埋葬壇平面図および断面図

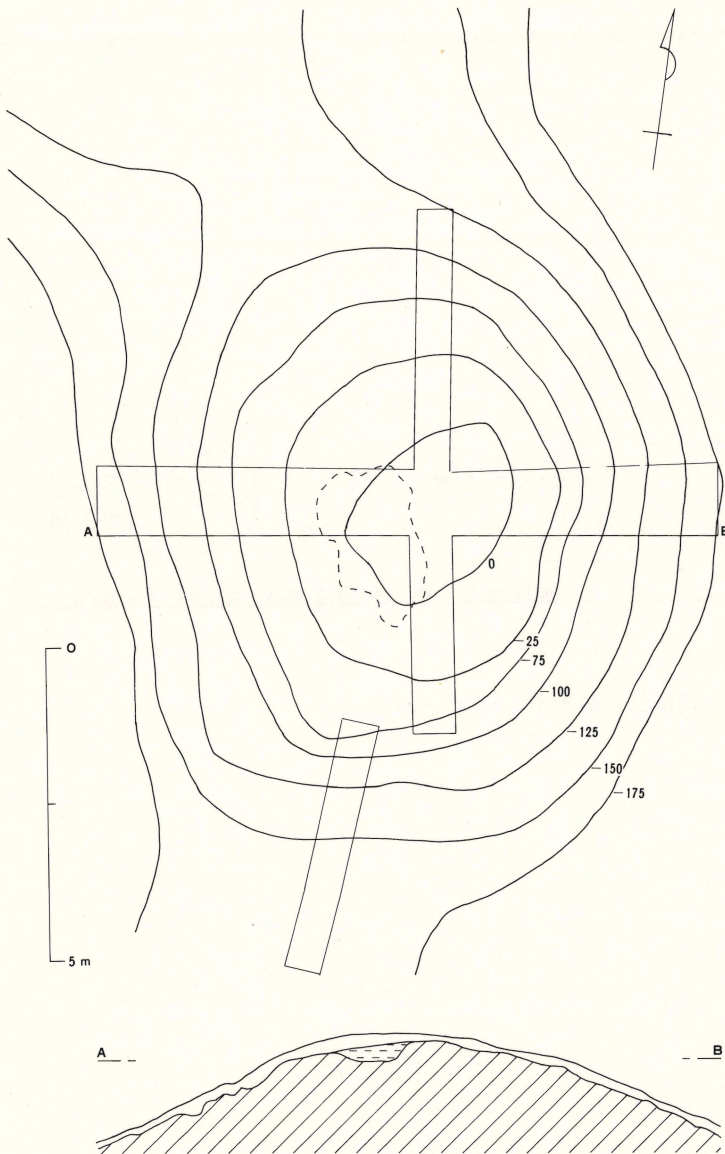
第4章 高代山 第2号墳

位置 第2号墳は、第1号墳の南南東に 1.5mを隔てて尾根筋に築かれている。基盤の標高はやはり36mである。両者の間にトレンチを掘ってみると、表土下の岩盤にはあらあらしく掘り剥された痕が残し、そこはむかしは現在よりも若干高かったらしく、それを切り下げて二つ

の墳丘に分離したことがわかった。

墳丘 (図版第16(1)、挿図第6) 第2号墳の墳丘も稜線上に築かれているので南北方向には流土がたまり、東西方向は流土が急斜面を流れ去って、墳丘は稜線の方に長く、その直角方向に短い。すなわち北北西-南南東を長軸とし長径 8.1m、直角方向の西南-東北の短径は 6.6mの楕円形で、高さは0.75m、復原して1mである。

墳頂部の東寄り地点にL字形の盗掘坑が岩盤



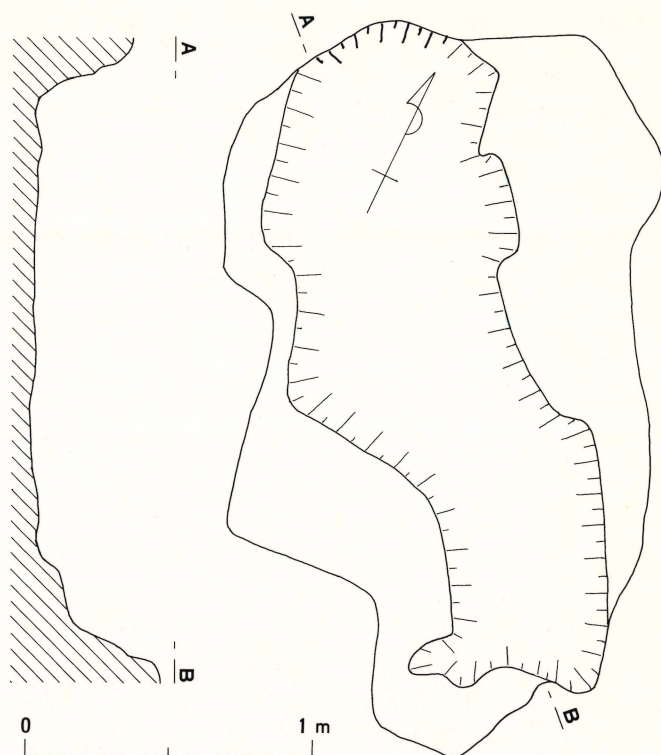
挿図第6 第2号墳墳丘平面図および断面図

を約20cm抉り抜く深さまで掘られていたが、発掘してみると、幸にも埋葬壙をはずれていた。

内部構造（図版第17(1)、挿図第7）

埋葬壙は現存する墳頂部のやや北端寄りに存し、長さ 2.6m、幅 1.3m 前後の北西—東南を長軸とする不整な形である。深さは約36cm～42cmで、床面は凸凹であり、土を少し入れて均して、その上面に木棺を納めたものと推定された。壙内にはかつて棺の上部を覆っていたと推定される含礫褐色有機土層が落込み埋積していた。

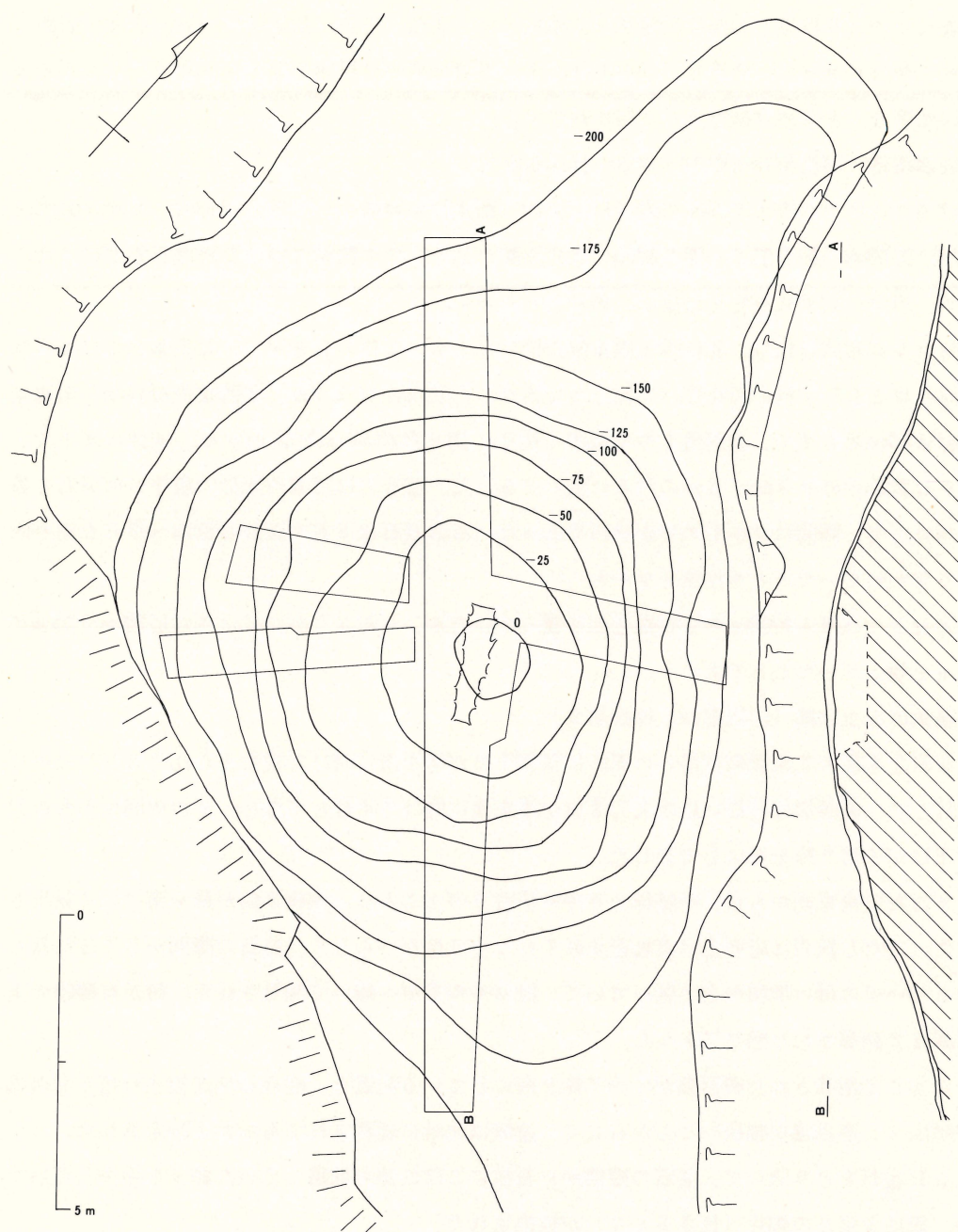
遺物 埋葬壙内は精査したが何ら副葬品は検出されず、墳頂部も全部表土層を剥し、墳丘の裾廻りもあまなく掘上げたが、供献品の破片すら見当らなかった。



挿図第7 第2号墳埋葬壙平面図および断面図

第5章 高代山 第3号墳

位置 第3号墳は第2号墳の南南東30mを隔てた地点の尾根上に築かれていた。標高36mの



挿図第8 第3号墳墳丘平面図および断面図

線がこの丘陵の中央部から北西へのびて来ている末端に位置し、第2号墳との中間にはわずかながら低まった鞍部状の地点をはさんでいる。この地点では尾根は北東側が強く侵蝕されて急斜面（小さい谷）をなしているのに対し、西南西側へは突き出ている。第3号墳はその稜線上の、どちらかといえば北東寄りに築かれている。

墳丘（図版第18(1)、挿図第8）

墳丘はやはり稜線の方に長軸をおく楕円形で、北西－南東の長軸径10.3m、北東－南西の短軸の径は約9mで、高さは1.5mをはかる。本墳は地山の岩盤の高まりを利用して、ある地点は切削り、ある地点は盛土して築かれていた。

内部構造（図版第18(2)第19・第20、挿図第9）

墳頂部の中央の表土下30cmの岩盤に、北西－南東に中軸線をおく長さ2.3m、北端の幅68cm、南端の幅58cmの長台形で、深さ60cmの竪穴を掘り込み、その四壁に扁平な河原石を縦にはめこんで、組合せ式箱式石棺を形成し、納められていた。

組合せ式箱式石棺は、北西端と南東端の壁にはともに1枚の石を用い、北東側および南西側の壁にはともに7枚の石を並べて組立ててあり、内法は長さ1.9m、北西端の幅40cm、南東端の幅は30cm足らずで、北西端をやや幅広く造り、深さは約30cmを測かった。床面は水平で、細かな黄色の砂を3cm～5cmの厚みに敷いてあった。蓋石には11個の大形の扁平の河原石を横並べにして、隙間には小形の礫が詰めてあった。なお蓋石は下方すなわち棺内へ平らな面を向けて置かれていたことが注意をひいた。

蓋石上には厚み約30cmの含礫褐色土が覆っていたが、おそらくかつてはさらに20cm～30cmの厚みを加えていたことであろう。

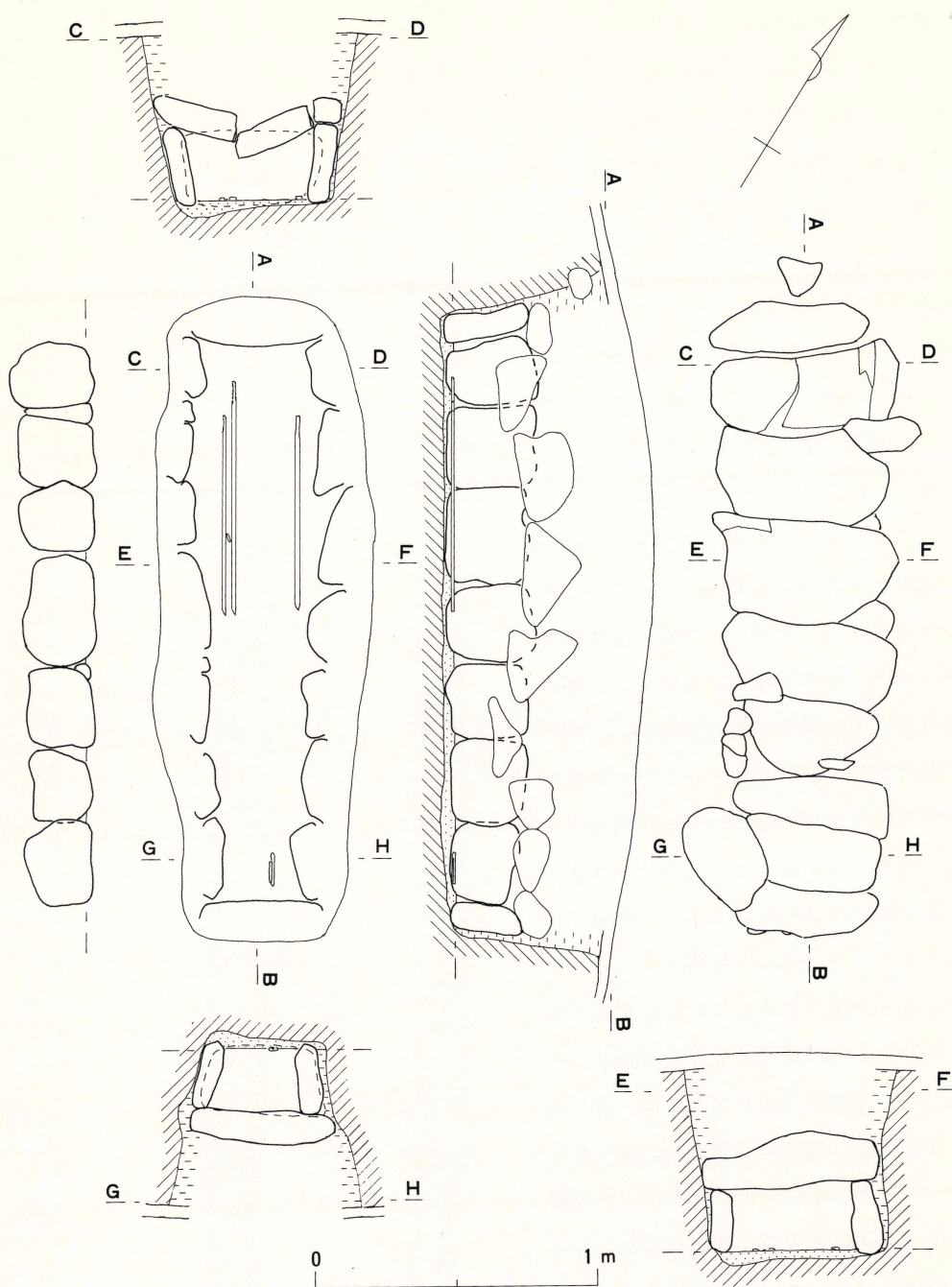
遺物の出土状態（図版第19、挿図第9）

石室北半部の北東側側壁沿いの面床に鉄剣1口が鋒を南に向けて横たえられており、それに相対して、南西側側壁沿いには大刀2口が鋒を南に向けて平行して存し、その中間に小形の刀子1口がやはり鋒を南にして存した。

また石室南東端からは、中軸線よりやや東寄りのところに、鉄鏃2個が鋒を南にして見出された。ただし鉄鏃は床面上に直接置かれていたのではないらしく、蓋石の隙間からこぼれ落ちたらしい土の薄い堆積の上に載っていて、鋒はやや下方へ傾いて発見された。何か有機物の上に載せて副葬された感じてあった。

こうして副葬された利器類がすべて鋒を南にしている配置と、組合せ式箱式石棺が北西端が幅広く、南東端が幅狭いことからして、遺骸は北枕に埋葬されてあったと推定された。

なお蓋石をとり除いて、蓋石の隙間から石棺にこぼれ落ち堆積していた細土を除去していた時、銀地金張りの細片（長さ3ミリ）が検出された。

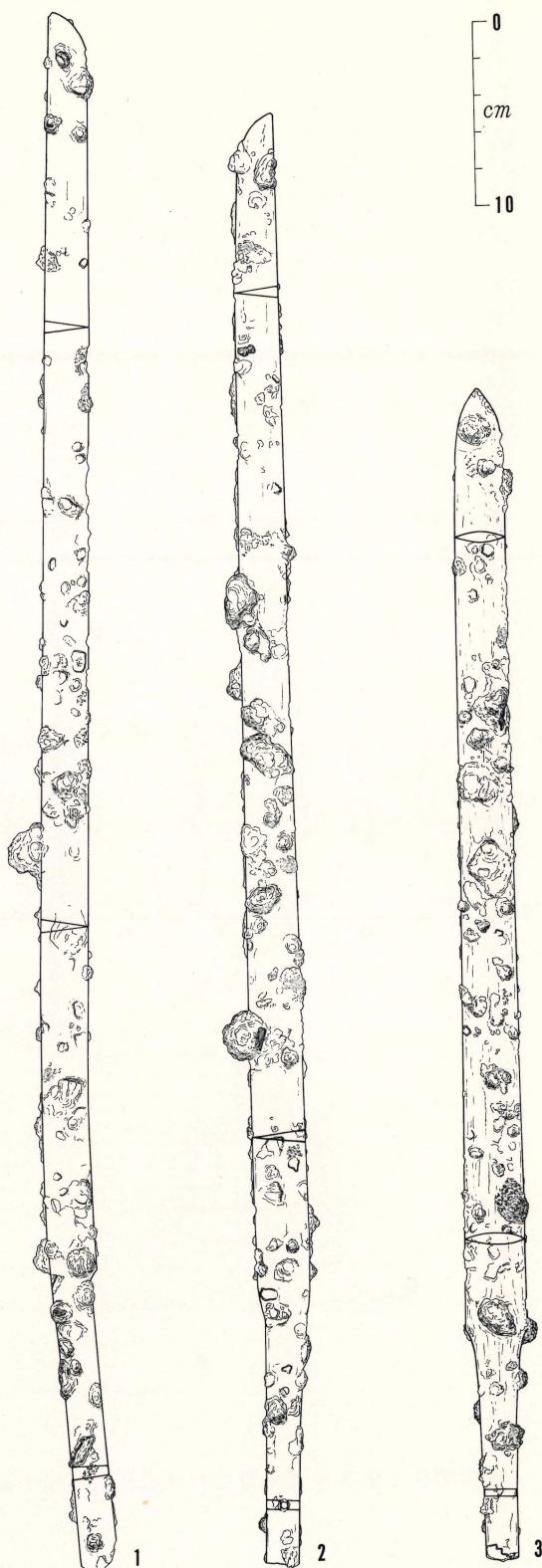


挿図第9 第3号墳の組合わせ式箱式石棺平面図および断面図(層序の記号の一部を省略)

遺物（図版第21、挿図第10・第11）

鉄剣（図版第21(1)、挿図第10） 1口である。全長64.5cm、^{まち}茎の長さ13cm、幅は末端近くで1.8cm、中央より少し身に近いところで2cmである。身に接する部分は斜めに幅広くなり、身にうつる部分の幅は3.4cmとなる。身は両丸造りで長さ61.5cm、中央部の幅3cm、厚み6mm、鋒近く（茎際から48cmのところ）で2.5cmをはかる。茎には目釘孔はなく、柄木や鞘は遺存しなかった。

大刀（図版第21(1)、挿図第10） 2口ある。ほぼ同大であるが片方が少し短い。挿図第10の(1)は全長85.5cm、わずかに内反りに造られ、片関式である。茎は長さ16.5cmで、総じて棟側が刃側よりも厚く、幅は中ほどの部分で2cmをはかる。関は刃側の長さ1cmほどの部分が斜めに拡がって形成され、身は関際の部分の幅が2.5cm、棟の厚み7mmである。そしてほぼ同じ幅で身の中ほどをこえるが、鋒から10cmのところでは2.2cmと幅狭くなり、ふくらをもった鋒に終る。茎には目釘孔は見られない。挿図第10の2は全長80cm、片関式で、刃側に2mmの関がある。茎の長さは15.7cm、幅は中ほどで1.9cm、身に近づくとやや幅広くなり、身にうつる関際は3.1cmに達する。茎の先端から3cmの位置と、9.2cmの位置とに径3mmの目釘孔を穿つ。身は基部から8cmの位置で幅3cm、棟の厚み6mm、鋒へ向かうにつれてだいに幅狭くなり、ついに幅2cmとなってふくらを持った鋒に終る。身はほぼ真直ぐであるが茎がわずかながら内傾



挿図第10 第3号墳出土の刀と剣

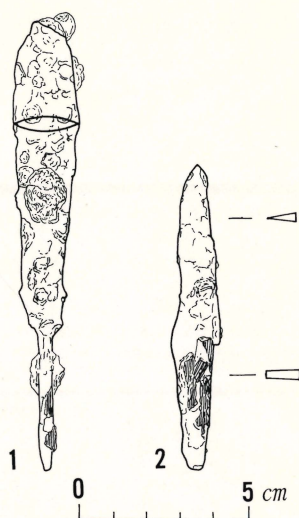
している。

刀子（図版第21(2)、挿図第11）

1口である。全長は 9.2cm、そのうち身の長さが 5.2cm である。片関式で、棟の側に関があり、1.5cmの段をなす。鋒は剣先風に棟もわずかながらふくらを持つ。身の中ほどの幅は 1cmをはかるが、関へ近づくほど刃部が内反りに作られており、関に接した部分は 1.5cm幅となる。茎は長さ 3.8cmで、柄に装った鹿角が遺存しており、さらにその上面に、片面のみであるが皮革状の有機物が付着している。

鉄鏃（図版第21(3)、挿図第11）

2個検出された。いずれも広根両丸造柳葉式（註1）で、ほぼ同大である。1個は破損がいちじるしく、ついに実測図を作成しえなかった。挿図第11の1に掲げた例について述べると、全長は 9.4cmで、身の長さ 9.4cm、茎の長さは 4.1cmである。身は^{こみぎわ}茎際から^{まち}斜め関風にしだいに身幅が広くなるが、茎際から 4.1cmの位置までは刃がついておらず、挿図第11 第3号墳出土の刀子と鉄鏃そこから鋒にかけて剣状の両刃となっている。鋒から 3.2cmのところが最大幅で 2cmをはかり、厚みは 4.5mmである。茎には部分的に箭竹が痕跡を残している。他の1個は挿図第11の右に見るごとく、茎が長く、身は中ほどが一定の幅を保ち、両端が狭まる文字どおりの柳葉形である。（註1）



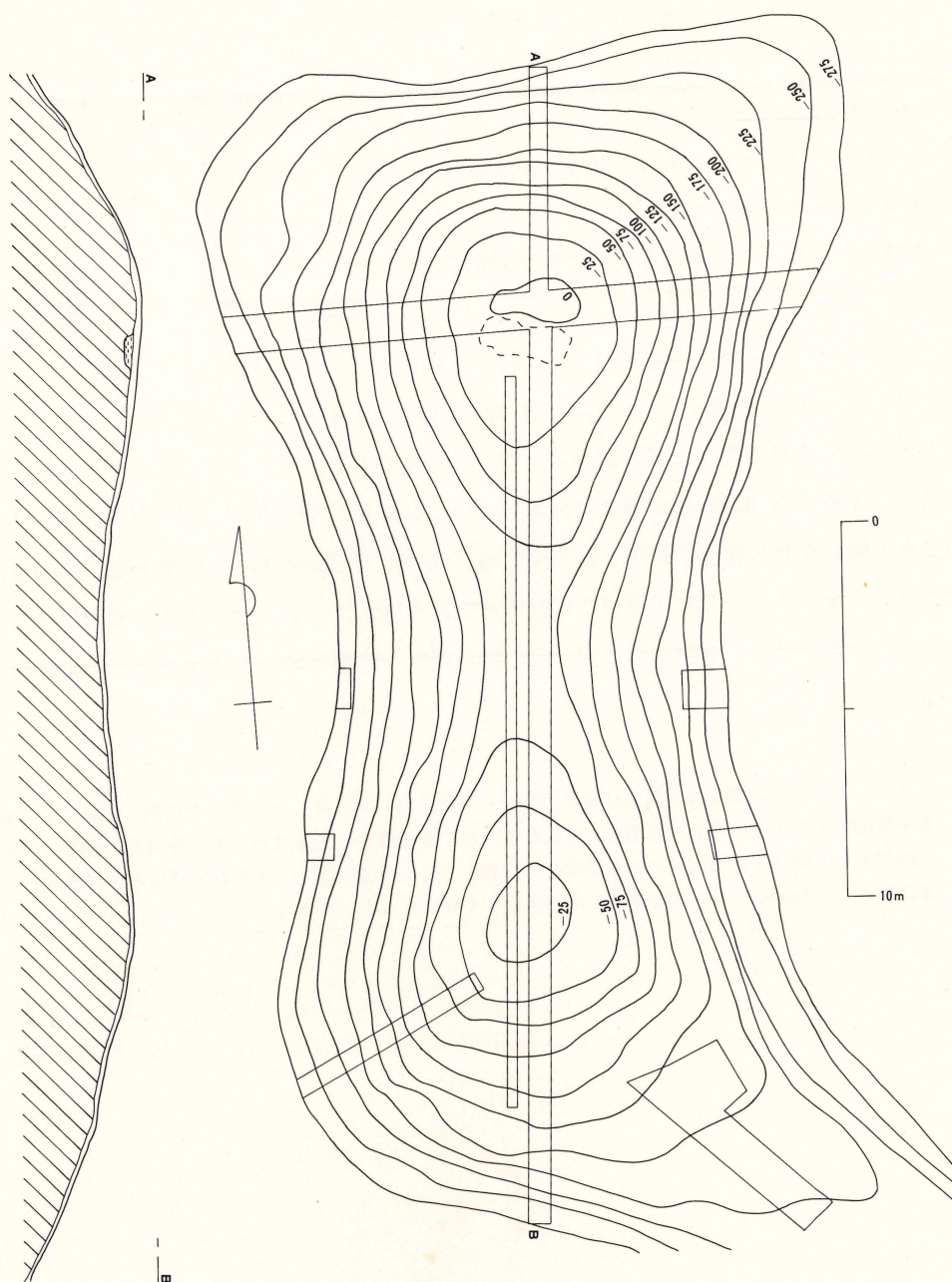
註1 この鉄鏃の類例は磐田市松林山古墳から多数出土しており、また前者の類例は京都府（丹後）南桑田郡篠村大字王子小字向山古墳から出土している。故後藤守一先生はかつて広鋒両丸造柳葉式の古墳文化前期から中期にかけて用いられた鉄鏃の一型式とされた（後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」人類学雑誌54の4 1939年）が、30年余りを経た現在もそれはうべなわれよう。



図版補1 第3号墳出土銀地金張り細片

第6章 高代山第4号墳

位置 第4号墳は高代山の尾根の中央より少し北寄りに占地し、トの字形の分起点に後円部をおき、南方へ前方部をのばす前方後円墳である。北北西20mに第3号墳がある。



挿図第12 第4号墳墳丘平面図および断面図

墳丘（図版第22(1)、挿図第12）

墳丘は、中軸線をほぼ南北におき、前方部を南へ向けている。地山の高まりを利用して周囲をあるいは切削り、あるいは盛り土して墳丘の形を整えているが、後円部の後方（北方）に続く稜線と、前方部の前方（南方）に続く稜線とが、その高さにおよそ50mの差があるので、前方部の南の稜線から見ると、後円部の北の稜線から見上げる方が、より高く立派に見える。ちなみに後円部北方の稜線の標高はおよそ39mで、東西の水田面からの標高は約12mである。

墳丘の東西に迫る侵蝕谷の斜面が急傾斜をなし、この両方向への封土の崩落がはなはだしいため、墳丘は原形をかなり損じている。

いま前方部前面の稜線を基準にして、単純に、墳丘の範囲を— 175cm等高線に囲まれた範囲とすると（挿図第12）、全長27.5m、後円部の径11m、高さ1.75m、前方部の幅11m、高さ1.5mとなる。しかし前方部の前端および後円部の後端の地山の岩盤が人工によって削られている範囲ならびに崩落した封土を計算に入れて推定せられる復原形は、全長29m、後円部の径12.5m、

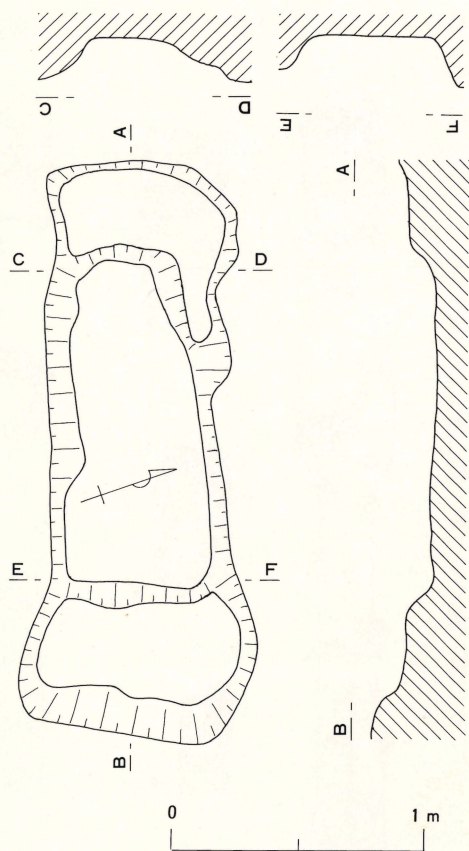
高さは前方部前方よりも後円部後方の基盤が低いことをも含めて2m、前方部の幅は12.5m、高さ1.5mである。なお墳丘中軸線のくびれ部の高さにくらべると後円丘頂は約75cm高く、前方部の頂きは約50cm高い。

内部構造（図版第23(1)、挿図第13）

後円部の頂きには、かつての密掘を語る凸凹がかなり広い範囲に見られた。

後円部の中央において、墳丘の中軸線と直交する東西方向に長軸をおく長さ1.3m、幅70cm深さ24cmの長方形の竪穴が地山の岩盤に切込まれて存し、その東方には同じ幅で長さ58cm、西方にはやはり同じ幅で長さ30cmの長方形で、深さ11～13cmの浅い掘込みが付加されていた。

敷石に用いられたとおぼしい平たい礫が、数個散乱状態で見出され、密掘前にはおそらく第3号墳の組合わせ式箱式石棺に類似した施設か、または床面に敷石を敷いて木棺を埋納してあったのではないかと推定された。



挿図第13 第4号墳埋葬墳平面図および断面図

遺物の出土状態 (図版第24(3)・(4))

遺物は表土直下からも、岩盤に掘込まれた長方形の小竪穴の底からも、その周囲の岩盤上からも散乱状態で発見された。破片となった鉄製品中には鉄剣・大刀・刀子・鉄鏃・鉋類似の工具・針などが識別されたが、唯一の例外として完形の鉄鉾が小竪穴の東南角に近い岩盤状から発見された。また須恵器片が2片検出された。

遺物 (図版第25・26、挿図第14・第15)

鉄剣 (図版第26(2)、挿図第14) の6は鋒部の残片で先端が欠いている。身幅2.4cm~2.5cmで第3号墳出土例よりやや幅狭い。

大刀 (図版第26(2)、挿図第14) の2は大刀の身の残片で、身幅3.1cm、第3号墳出土の2口よりも幅広い。挿図第14の3と4は大刀の茎の残片であるが、別個体で少なくとも2口はあったことが判る。3には直径約3cmの目釘孔があり、4には柄木の一部がなお遺存していた。

鉄鉾 (図版第26(1)、挿図第14)

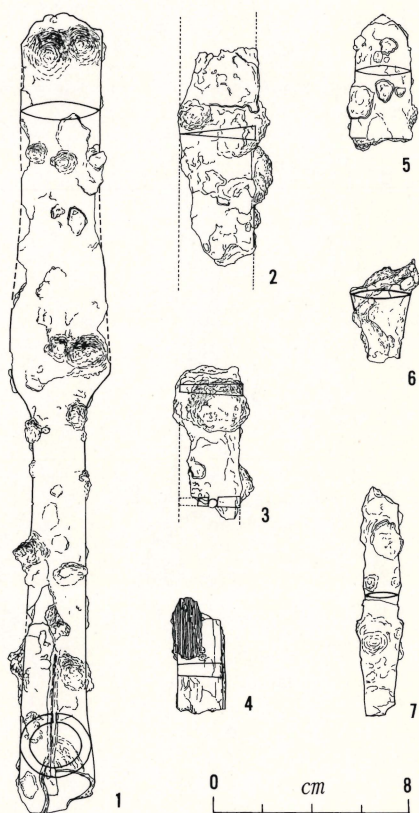
鋒部をわずかに欠失している。現存部の長さ33cm、身は両丸造で、幅は最も広い部分で4cm、鋒に近い部分で3cmをはかる。関は無く身の基部から1.5cmの長さが斜めに狭まって袋部にいたる。袋部は長さ16.5cmで、柄をすげる中空部の長さが11.5cm、その下端9cmほどが合せ目を残している。袋部の下端はやや楕円形で、長径3cm、短径2.6cm、袋部鉄板の厚みは4mmをはかる。

鉄鏃 (図版第25、挿図第15)

10個体余り検出され、2型式に類別された。挿図第15の6は箆被狭鋒両丸造三角形式(註1)で、全長13.7cm、茎の長さは3.8cm、身は長さ4.8cm、その下端の幅は2.5cmである。挿図第15の5は両丸造箆被鑿箭式(註2)で、全長14.6cm、茎の長さは約3cm、幅1cmである。茎に竹をかぶせ、その上面に桜皮を巻いたものが幾例もある(挿図第15の7・8・10)が、おそらく上記の2型式の鉄鏃はともにこのようにして矢竹を装着したのであろう。

針 (図版第26(4)、挿図第15)

鉄製の針の残片が3片検出されている。直径約2mmで、現在する残片の長さが3cmであるからそれ



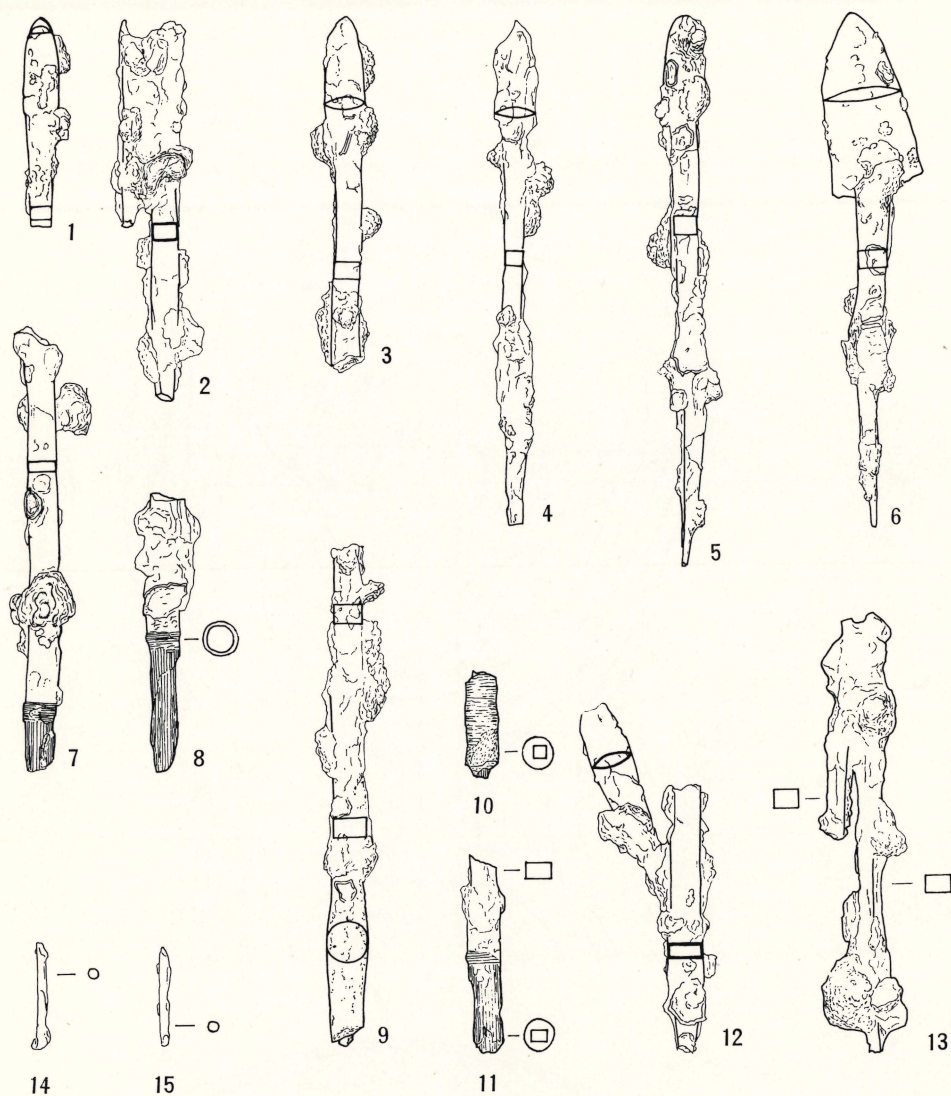
挿図第14 第4号墳出土の鉄鉾・剣・大刀・工具類

以上の長さであったことはまちがいない。

鉈（図版第26(3)、挿図第14）

鉈の残欠が1個見出された。現存部の長さ 9.4cm、幅は中ほどで約1cmをはかり、両刃である。

なお挿図第14の7は関無し式の剣の身から茎に移る部分に形が似ているが、狭まった部分の両側縁も刃をなして、一種の切削工具の残片かと思われる。

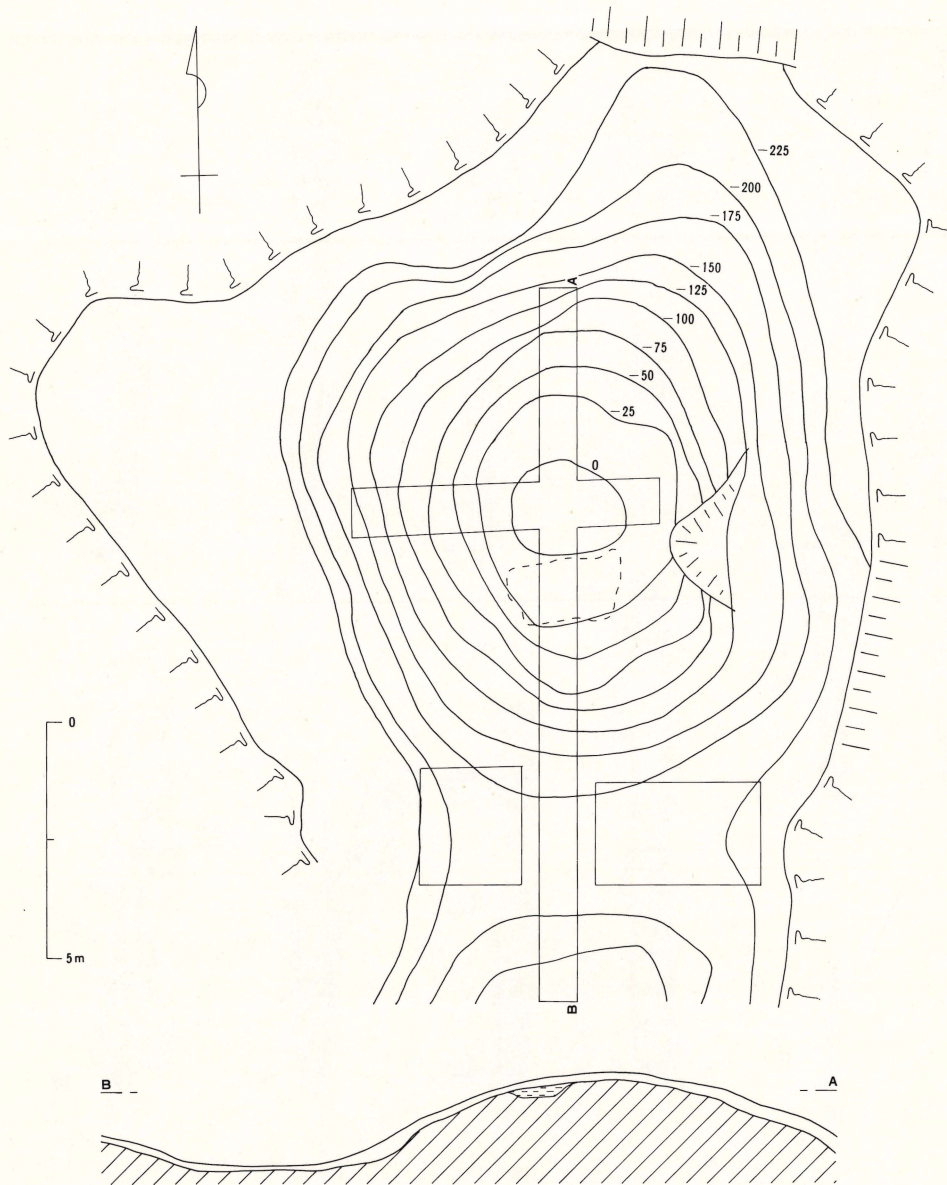


0 10
cm

挿図第15 第4号墳出土の鉄鏃と針

第7章 高代山第5号墳

位置 第5号墳は、第4号墳の後円部が営まれている地点から東北東へ分岐した支丘の先端に占地し、第4号墳からの距離は約70mをはかり、基盤をなす尾根の標高は約55mである。



挿図第16 第5号墳墳丘平面図および断面図

墳丘 (図版第27・第28(1)、挿図第16)

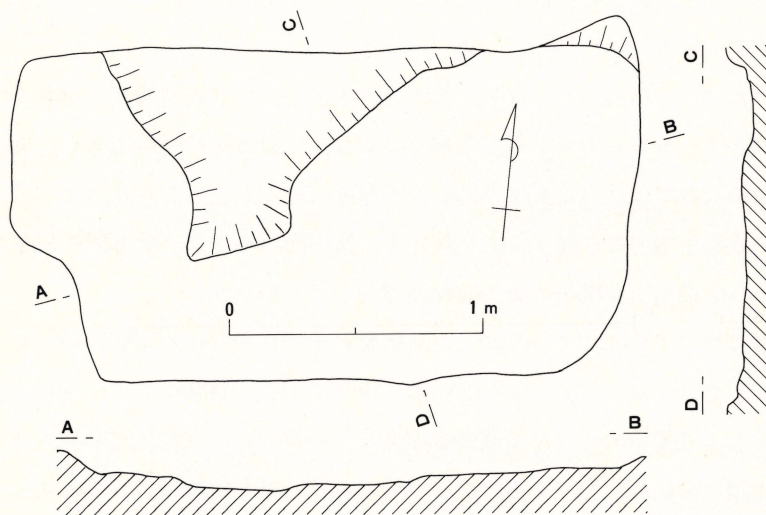
支丘の墓部へつながる西南側の地山を、深さ約50cm、上端を2.5cm幅の堀状に掘り抉って、支丘端を独立せしめ、東側には土を積み加えて円丘を整えている。墳丘の規模は尾根の稜線に沿った南北の直径12m、それと直角をなす東西の直径10mで、やはりやや隋円形を帯びている。高さは墳丘としては1.75mであるが、南西側の堀の中央部も最も低い地点を基準とすれば約2mである。

内部構造 (図版第28(2)、挿図第17)

墳頂部のやや南寄りの地点の地山に、幅約1.3m、長さ2.44mの長方形で、深さ約16cmの掘り込みを東西方向に長軸を置くように設け、その床面にこの支丘の西裾の水田に見られる黒褐色沖積土を敷いて、その上面に木棺が納められていたと推定され、その木棺の上面ならびに周囲の墳頂部全面にわたって、再び褐色沖積土で蔽った後、さらに含礫黄褐色土をその上面に載

せて墳頂面を形成していた。

遺物 木棺が埋置されていたと推定される黒褐色有機土層を敷いた床面からの副葬品も見いだされなかった。しかし黒褐色有機土層中からは無文の土師器の小破片が数片検出された。これは副葬品ではなく、湿地



挿図第17 第5号墳埋葬墳平面図および断面図

帯から黒褐色有機土が採土されたときに、以前から含まれていた土師器片がそのまま持ち運ばれて来たものと推定された。

第8章 高代山古墳群の築造年代と性格

I

このたび調査した5基の古墳は、いずれも地山の岩盤に竪穴を抉りこんで埋葬施設を営んでいる点が共通していた。第1号墳・第2号墳が素掘りで床面を土でならした程度であるのに対し、第5号墳は床面に黒色粘土を敷き、棺の上面をもそれで薄く蔽っていたと推定され、第3号墳は平たい河原石を用いた組合わせ式箱式石棺を納め、第4号墳もまた同様であったと推定される等の差異は認められるが、地山の岩盤に埋葬竈を掘り下げるといふこの共通な手法は、全国的にも古墳文化前期から中期にかけての古式古墳に時おり見られる手法であり、この5基の古墳が相対的に古い年代のものであり、またたがいに大差ない時期に築造されたものであることを示すものと見なしてよいであろう。

しかし第1号墳・第2号墳・第5号墳の3基は何ひとつ副葬品を検出しえず、その築造年代をさらに詳しく求める術がなかった。

第3号墳の組合わせ式箱式石棺内には、鉄剣・大刀・刀子・鉄鏃などの利器類が副葬されていたが、大刀にはなおわずかながら内弯する古風が残っており、鉄鏃の形態は広根両丸造柳葉式であって、この古墳の築造年代は古墳文化中期にまで遡るものとしてよからう。

第4号墳は後円部の直径が前方部の幅とほぼひとしく、後円部の高さより前方部の高さがわずかに低いその墳丘は、中期前方後円墳の典型的な型式としてよからう。

その埋葬竈内は盗掘でひどく荒されていたが、なお組合わせ式箱式石棺の側壁に用いたとおぼしい平たい河原石若干とともに、鉄剣・大刀・鉄鉾・鉋類似工具・鉄鏃などの利器類と、須恵器の破片が検出された。鉄鏃の形態には篋被狭鋒両丸造三角形式と両丸造篋被鑿箭式の2種類があり、どちらも古墳文化後期に至って盛行する型式である。須恵器片は器台の坏状部の下半と推定され、細密な波文は美しくなだらかであるが、その上段を太い沈線で区画され、尾三地方古墳出土須恵器に対比すると第1型式末ないし第2型式初頭という感じである。すなわち岩盤に穿った埋葬竈内に組合わせ式箱式石棺をおさめている点では第3号墳と一致するが、副葬品の鉄鏃の型式からいうと第3号墳よりも第4号墳の方が新しいことになり、そして須恵器片からして第4号墳の築造年代は5～6世紀の交の前後と考えたい。第1号墳・第2号墳・第5号墳もこの2古墳と大差ない時期に営まれたわけであり、高代山古墳群は全体として古墳文化中期末に築かれ始め、終末はあるいは後期初頭に降るかも知れないが、前後に大きな開きのない短期間に営まれた小群集墳としてよからう。

II

第1号墳と第2号墳とは、墳丘の規模がほぼひとしく、内部構造も同じように地山の岩盤に

不整な長方形の埋葬壇を掘込んだだけの簡単な施設であって、何らの副葬品も有しなかった。そして二つの墳丘はわずか1mを隔てて営まれ、しかもその中間地点は岩盤を掘り削って窪ませ両者が互いに独立した墳丘となるように工事が加えられていた。

第1号墳および第2号墳の被葬者は、おそらくは庶民層であって、その社会的階層が同一であっただけでなく、相互にはなはだ親近な関係（たとえば血縁関係・家族関係）にあったものであろう。

第5号墳は両者より墳丘の規模が少しく大きいが大差はなく、内部構造は地山の岩盤に掘り込んだ埋葬壇の底面ならびに埋置した木棺の上面や周囲を黒色粘土で蔽うというやや丁寧な作りであったが、やはり副葬品は何も見出されなかった。ただし第1号墳・第2号墳の被葬者と同じく、第5号墳の被葬者も庶民層であったことは疑いないが、内部構造における差異と、第5号墳の位置が第1号墳・第2号墳とははるかに離れた丘端に築かれていることを合せ考えると、第5号墳の被葬者は第1号墳・第2号墳の被葬者たちとは別家族と考えてよからう。

第3号墳はこの3古墳に比較すると、墳丘の規模がやや大きいだけでなく、内部構造も岩盤に細長く抉り込んだ埋葬壇内に組合わせ式箱式石棺がはめこんであり、大刀2口、剣1口、子刀1口、鉄鏃2個が副葬されていた。しかし玉類など装身具はみとめられなかった。

第3号墳の被葬者は、第1号墳・第2号墳・第5号墳のそれに対比すると、いちおう地域豪族層とみなしてよからう。そしておそらくは男性であつたろう。

なお注意すべきは副葬品上にうすく堆積していた細土中から検出された銀地金張りの装身具とおぼしい品の微小な破片である。ただしこの第3号墳の被葬者の埋葬にあたって、参集した人々の中に、そのような豪華な装身具を身につけた人物がいたということを語っているのではなかろうか。(註1)

第4号墳は小規模ではあるが前方後円墳である。前方後円墳という墳形の築造には、特定の社会的制約（たとえば身分）があったと解する(註2)ことが許されるならば、第4号墳の被葬者は第3号墳のそれよりもより高い身分と考えてよからう。しかし内部構造は思いがけなく小形で、幼児を納めうるにとどまる規模であった。副葬品はさすがに多種類で、鉄剣・大刀・鉾刀子・鉋・鉄鏃・須恵器など種類も数量も第3号墳のそれを上まわるものがあつた。装身具はついに検出なかったが、これは盗掘の際にすべて持去られたものとも考えられる。ともあれ盗掘で組合わせ式箱式石棺がわずかに痕跡を残す程度にまで破壊され、後にわずかに遺存した副葬品の破片類でさえ、なお第3号墳のそれをしのぐ種類・数量であり、しかもその被葬者であったことを考慮すると、第4号墳の被葬者の身分が第3号墳の被葬者よりも高かったことは疑うべくもなからう。

かくて高代山古墳群5基は、墳丘、内部構造、副葬品からして、3階層に分けられる。第一階層が第4号墳、第二階層が第3号墳、第三階層が第1号墳・第2号墳・第5号墳の3基であ

る。第一階層はこの地方の地方貴族層につながるものであり、第二階層はこの周辺地域での地域豪族層であり、第三階層は庶民層である。

この5基の古墳がその築造年代に大きな開きがなく、ほぼ同時代に概括しうるものであることを考えると、相互の間に生じているこうした身分差・勢力差・富の差すなわち階層分化は何に原因するのであろうか。

けれど当時のわが国においては、もっぱら農業が経済の基礎をなしていたことを考慮すると、すでにこの地域においても土地私有が発生し、発展しつつあったことを示すものではなかろうか。(註3)

しかし5基の古墳は、湿地帯にかこまれた(註4)独立丘高代山の尾根の稜線上に、思い思いに地山の高まりを利用して築かれており、第4号墳が尾根の中央の標高のもっとも高い地点を選んで築かれているほかは、他にはその立地には特別な差異は見られない。けれどそこには階層差はすでに発生してはいたが、なお各古墳の被葬者間には主従の関係(たとえば作り出しや陪塚への埋葬にみられるような身分的隷属関係)は存しなかったと見てよかろう。すなわち地縁にもとづく村落共同体の内部における同根の民主的権利がなお崩壊せずに存し、この無差別な埋葬地選定に表象されていると考えてはいかがであらうか。

III

原野谷川や沖積地の湿地帯に囲まれた独立丘高代山は、すでに階層分化が深く進行した村落共同体の集落墓域であった。しかし、ここにどうして第4号墳のような前方後円墳がにわかに出現したのであろうか、その背景をすこし見渡して見よう。

現在の掛川市域には7基の前方後円墳が遺存している。すなわち倉真川・初馬川流域の下山古墳と天王山第5号墳の2基、原野谷川流域の大塚古墳・行人塚古墳・瓢塚古墳・金塚古墳・高代山第4号墳の5基である。(註5)

しかし前方後円墳それ自体の分布からすると、原野谷川と逆川とが合流するあたりまでがおのずから一つの群を形成しており、現在は袋井市に属している宇佐八幡第1号墳と、その西隣の尾根の権現山古墳の2基を原野谷川流域古墳群に追加すべきであろう。そこでいまこれらの9基の古墳の概要を表示すると次のごとくである。

古墳名	所在地	墳丘の規模				外部施設	内部構造 (埋葬施設)	出土遺物	文献(備考)
		全長	後円部径	後円部の高さ	前方部前 端の幅	前方部の 高さ			
下山古墳	掛川市上西 郷字下山	約85m	40m	5.5m	36.5m	2.9m			静岡県史第1巻
天王山 第5号墳	掛川市下西 郷字北門	19.8m	9.5m	2.6m	8m	1m			掛川市教育委員会調査
大塚古墳	掛川市吉岡	55m	43m	7m	26m	2m	葺石・埴 輪・周堀		"
行人塚 古墳	掛川市吉岡 1195の2	(遺存部) 約40m							春林院住職大竹準一氏 の教示による。
瓢塚古墳	掛川市高田	65m	40m	5m余	22m	3m余	葺石・埴 輪	勾玉・管玉・仿 製四獣鏡・仿製 神獸鏡・刀子	掛川市教育委員会調査
金塚古墳	掛川市各和	約60m	40m	5m	15m	2m	葺石・埴輪 ・前と後と に陪塚1基 ずつ存す		"
高代山 第4号墳	掛川市細谷 字山合	29m	12.5m	2m	12.5m	1.5m		鉄剣・大刀・刀 子・鉄鏃・鉄鏃 ・施、工具類・ 須恵器	本書第6章
宇佐八幡 第1古墳	袋井市国本	30m	16m	3m	6.5m	2m			筆者踏査
権現山 古墳	袋井市国本	16m		2.5m			埴輪		

付載図1 掛川市域の前方後円墳一覧表

このうち前方部をかけ橋状に残して馬蹄形の周堀をめぐらした帆立貝式墳大塚古墳と、中央部を切断させて後円部と前方部の一部だけが残っている行人塚古墳の2基を除く7基の前方後円墳を対比すると、まず規模からいうと、全長80m級1基、60m級2基、30m級2基、20m級2基となる。すなわちわが高代山第4号墳は30m級で、前方後円墳としては小規模の部類に属している。

次に前方後円墳としての類型からいうと、60m級の全古墳はともに後円部の径が前方部前端の幅よりもはるかに大きく、また高さも後円部が前方部よりもはるかに高い銚子塚式（註6）である。ただし瓢塚古墳後円部の内部主体をなす粘土槨から出土した仿製四獣鏡と仿製神獸鏡の図文がいずれもいちじるしく変形している点からすると、その年代は古墳文化中期中葉頃まで降るものごとくである。金塚古墳が多少年代が遡るとしても中期前葉より遡るものではなからう。

下山古墳は80m級で、この地域最大の規模であるが、前方部前端の幅が後円部の径に近づき、高さは後円部が前方部よりもかなり高いが、銚子塚式から瓢塚式への移行期とも見なすべきその墳丘は、けだし金塚古墳や瓢塚古墳よりも相対年代を新しくおいてよからう。そして倉真川流域の狭小な地域にこのような大型古墳が突如として出現し、孤立1基のみ存するのはいささか不自然である。おそらくこれは金塚古墳や瓢塚古墳に系譜的につらなるものと推定される。

なお大塚古墳および行人塚古墳も、瓢塚古墳と指呼の間に占地する点では相互間に系譜的なつながりがある可能性が強い。行人塚古墳は墳形の細部や出土品が詳らかでないのとおくとして、大塚古墳は同一類型の帆立貝式墳が天竜市船明の光明山古墳の南に接して発見され、昭和46年春発掘調査（註7）の結果、中期後葉の営造であることが明らかとなったので、ほぼ同年代の築造としてよからう。すなわち瓢塚古墳よりやや年代の降る営造である。

高代山第4号墳が瓢塚式前半期型（註8）の墳丘ではあるが、その年代は中期ないし後期初頭と見なされることはすでに記したごとくであるが、全長30mないし20mの小形前方後円墳が一般的に営まれるのは、尾張・三河・遠江を通じて中期後葉から後期にかけての現象である。天王山第5号墳・宇佐八幡第1号墳・権現山古墳の3基もそれぞれ営造年代に新古はあっても、高代山第4号墳に前後して営まれたものと想定してよからう。

ひるがえって袋井市域のうち、むかしの山名郡地域（註9）における前方後円墳の分布を見ると、鷲巣・久能地域に2基、高尾地域に4基（註10）が知られているが、いずれも全長30m級の小形前方後円墳のみである。

すなわち養老6（722）年に山名郡を分置する以前の佐益郡（現在の掛川市と袋井市の大部分を合わせた地域）の郡域において前方後円墳がいち早く築かれ始め、その規模も大きなものが多く、数も多かったのは原野谷川流域であった。いわばこの地方の政治的中心を形成していたのである。幼児を埋葬したと推定される高代山第4号墳が前方後円墳として築かれた背景はかくのごとくであった。

註1 高代山の南西には100m離れて大きな独立丘岡津原がある。この岡津原の南部、高代山から500mの地点にかつて大規模の古墳があり、その東南方の池を埋めるために墳丘から土取りした際に舶載の画文帯神獸鏡が1面出土した。それは九州から関東にまたがって現在12面を数える同型鏡が発見されたことで注目されており、宋書の記す倭の五王の時代に輸入された鏡と考えられている。当時ヤマト王朝と深く結びついた人物がこの地方に住んでいたことを示す。

註2 久永春男「三河における前方後円墳・前方後方墳の分布」(『岡崎市北部の古墳』愛知県立岩津高等学校 1957年) 末永雅雄『古墳』学生社 1969年

註3 織布や木材加工は各村落で行われていたであろうが、それは自給自足の範囲を出ず、製鉄・鍛鉄や製塩や製陶業のごとく他地域への輸出をも目的とした工業も確立してはいたが、それは原料に恵まれた特定地域で生産されたにとどまる。未だ貨幣が出現するにいたらなかった当時のわが国では、尾張・三河・遠江を通じて広い湿地地帯を有する地域にいち早く発生した古墳文化中期の群集墳に一般的に認められるこうした階層分化は、土地私有の成立を基盤にしたものと考えざるを得ない。

久永春男「松が洞古墳群の性格」(『守山の古墳 調査報告第一』名古屋市教育委員会1966年)

註4 高代山の東北には近年まで池があったという。また北方には上野原・下野原・西野原・西柳原・東柳原・塚越・東姥田・西姥田・上船原・下船原・橋向・中坪などの字名の水田がひろがっているが、これらはすべて長地形地割の条里制遺構である。

註5 岡津原の画文帯神獸鏡を出土した古墳が前方後円墳であったとする説があるが、むかしその墳丘を壊して東方の池を埋立てる作業に加わった地元の古老加藤与次兵衛氏の話によると、それは大形の円墳であつたらしく、前方後円墳ではなかったようである。

註6 故後藤守一先生は前方後円墳の形態を3型式に分類され、銚子塚式→瓢塚式→二子塚式の順に編年された。

後藤守一「古墳の編年研究」(『古墳とその時代(一)』1958年)

註7 山村宏・大崎辰夫2君と筆者とが担当して昭和46年3月～5月に発掘調査を行なった。帆立貝式前方後円墳であることもその際に明らかとなった。

註8 久永春男「名古屋市守山区の前方後円墳 一補説一」(『名古屋市東部の前方後円墳』東海古文化研究所 1968年)

註9 本書第9章参照。

註10 静岡県教育委員会編『静岡県遺跡地名表』(1961年)による。

大谷純仁氏の教示によると、高尾地域では最近2基が新たに発見されたが、いずれも30m級の小形前方後円墳であるという。

第9章 高代山古墳群の歴史的背景

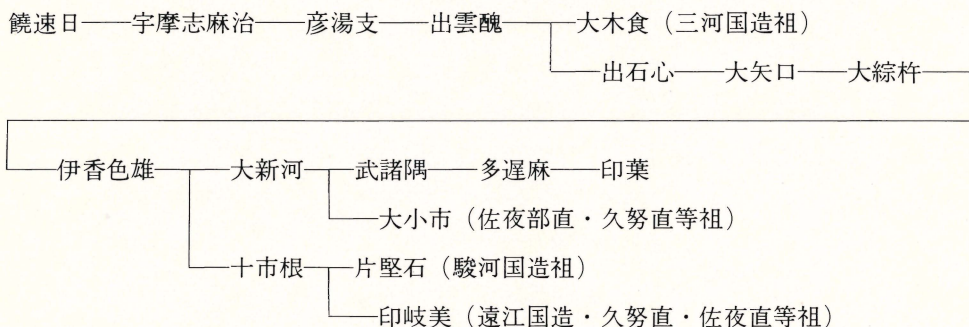
現在の掛川市域は、10世紀前葉に編纂された倭名類聚抄所載の佐野郡とほぼ同じ範囲を占めている。すなわち倭名類聚抄によると、当時の佐野郡には山口・小松・邑代・幅羅・日根・駅家の6郷があった。そして現在、幡羅郷は原野谷川流域、邑代郷は垂木川流域、小松郷は逆川下流流域、日根郷は倉真川・初馬川流域、駅家郷は掛川市街地域、山口郷は逆川上流流域に比定されている（註1）が、これらの各地域にはそれぞれ少なからぬ後のぼる古墳や横穴墓があって、付近に古くから集落があったことを語り、そこにおのおの郷が存在したことはうべなわれる。

しかしまた続日本紀には「養老六年二月丁亥、割遠江国佐益郡八郷、始置山名郡」と記載され、養老六(722)年以前の佐益郡(註2)は、山名郡(註3)すなわち現在の周智郡森町および袋井市域のうち太田川以西の地域をほぼ合わせたほどの広さであった。

ところでこの地域の古代の政治的社会をうかがい得る文献は現在のところはなほ乏しい。信頼するに足る文献としては、天平十(738)年の駿河国正税帳に佐益郡散事丈部監麻呂の名が見え、万葉集卷廿に山名郡の丈部川相、佐野郡の丈部黒当と生玉部足国の防人歌が収録されているのを挙げ得るにとどまる。いずれもこの地域を本貫とする人々であるが、丈部を氏とする人々が多く、散事の地位にある人物もいるのは注意をひく。太田亮氏は丈部を安倍臣の部曲としておられる(註4)が、新撰姓氏録の左京皇別には和迺臣の同族と称する例、和泉国皇別には紀宿禰同族と称する例があり、山城国神別には鴨県主同族と称する例もあってさだかでない。けだし地方によって異なった豪族の支配下にあった部曲かも知れない。

次にいわゆる偽書に属し、信頼度はやや劣るが、無視し得ないのは先代旧事本紀に収められた天孫本紀と国造本紀とである。

天孫本紀によると、物部氏がこの地方における最も強大な支配的氏族であったごとくである。
(註5) その系譜のうち、この地方に関係のある部分を抜き書きすると次のごとくである。



国造本紀には

遠淡海国造 志賀高穴穗朝 以物部連祖伊香色雄命児印岐美命定賜国造

久努国造 筑紫香椎朝代 以物部連祖伊香色雄命孫印播足尼定賜国造

珠流河国造 志賀高穴穗朝世 以物部連祖大新川命兒片堅石命定賜国造

参河国造 志賀高穴穀朝 以物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命定賜国造

と記され、天孫本記の記載とはほぼ符節を合わせている。ただし天孫本記の系譜では伊香色雄の玄孫にあたる印葉を、国造本紀では伊香色雄の孫印播とし、久努国造の祖と記している。

ここには三河・遠江・駿河にまたがる物部氏の政治的支配地域が列挙されており、けだし、佐夜直・佐夜部直の「佐夜」は続日本紀の「佐益」、倭名類聚抄の「佐野」にあたるとしてよからう。また久努直・久努国造の「久努」は、山名郡努郷の「久努とみなしてよからう。

そしてサヤという地名は郡名にのみ存して郷名には見られぬこと、直という姓が地方国造層に一般的な名称であって天武紀十三（985）年条に制定を伝える八色の姓の中には存しないものであることを考慮すると、佐夜直はかなり古くからのこの地域の郡司層豪族であった可能性がある。次に、佐夜部直という氏姓が語るように佐夜直一族は佐夜部と呼ぶ部曲をかつては所有していたらしい。（註6）

久努は佐益郡から山名郡が分置されて後は、山名郡中の一郷名に過ぎないが、久努直は佐夜直の一族として直姓を名乗ったのであろう。そして常陸国風土記によると、郡司層地方豪族の要請によって郡（註7）が分置される場合、新しい郡の郡司にはその一族が任命せられるのが通例である。山名郡の場合、郡名の山名を冠した氏族は現在知られていないが、あるいは久努直一族が郡司となったことがあったかも知れない。しかし久努国造という称号・地位についてはわかには信じがたい。その理由の一は、大化改新前の東国地方の国は後代の一郡または複数の郡を合せた広さであるのが通例であるが、久努の場合はわずかに一郷の範囲にとどまり、周辺のもっと広汎な地域をも含めて久努と呼んだ形跡はまったく存しない。その二は養老六年以前の佐益郡地方における前方後円墳の分布を見ると、その数からいっても規模からいっても原野谷川流域が中心をなし、久努郷に比定せられる袋井市久努西・久能地域は小規模の前方後円墳2基が存するにとどまる。けだし久努国造という称号は後世の作為である可能性が強い。

なお逆川下流の掛川市大字高御所・篠場・平野・領家・細田・梅橋・徳泉にわたるあたりには中世に曾我莊（註8）という莊園があり、大字領家には曾我前・曾我背という小字名が今も残っていることをふまえて、国造本紀に「素賀国造、檀原朝世始定天下時、從侍来人名美志印命定賜国造」とある素賀国をこの地方に比定する説が古くからある。（註9）しかし、律令制国家成立以前の国は、その名を郡名・郷名に残すのが通例であるのに、この地域においては佐野郡および山名郡はもちろん周辺地域にも、郡郷名にソガと訓みうるものがなく、江戸時代の村名にさえそれが見られないこと、佐夜直一族は大化改新以前からこの地域における支配的豪族であったと推定されるが、そのほかに国造として佐夜直一族をも制しえたような豪族が存在した形跡は現在知られている資料の限りでは認められないこと、国造本紀には神武朝に国造に任ぜられたとの伝説を記す例は他に8例あるが、すべて畿内と九州とに限られていて東征説話

の投影が見られるが遠江地方はこの説話にかかわりをもたぬ遠隔地であること、こうした条件から推すと、この掛川市を中心とする地域がかつて素賀国であったとする根拠ははなはだ薄弱といわざるを得ない。

註1 太田亮『遠江』1927年

註2 天平九（737）年駿河国正税帳には「佐益郡」、万葉集卷廿には「佐野郡」と記している。

註3 続日本紀には八郷とあるが、倭名類聚抄は山名郡の郷として、山名・食田・宇知・信芸・荻戸・久努の六郷をあげているのみで、前者が「六」を「八」と誤記しているのか、後者に記載漏れがあるのか、現在のところまだ詳らかでない。またこの六郷のうち、久努郷が現在の大字久能から大字鷺巣にかけての地域であることはほぼまちがいないであろうが、他の五郷についてはその比定の諸説があって未だ定説がない。しかし山名郡の範囲は現在の袋井ならびに周智郡森町に属する地域のうち、ほぼ太田川の左岸流域地域とみなしてよからう。

註4 太田亮『遠江』（前出）

註5 遠江国を本貫とする物部氏については、天平10年の駿河国正税帳に「遠江国使物部石山」、天平12年の浜名郡輸租帳に「物部賀佐麻呂」「物部白麻呂」、万葉集卷廿に「長上郡・物部秋持」「長下郡・物部古麻呂」、日本霊異記に「榛原郡人物部古丸」等の記載があって、広く分布していたことが明らかで、わが佐野郡・山名郡地域にも勢力をのばしていた蓋然性は少なくない。

註6 なお新撰姓氏録（815年）の摂津国神別に佐夜部首を伊香我色雄命を祖とする物部氏の一族とする記載がある。太田亮氏は、孝徳紀大化2年の条に「或本に云う、難波の狭屋部邑の子代の屯倉を壊ちて行宮を起つ」とあるが、この地は摂津国西成郡にあり、佐夜部首はこの狭屋部邑の支配氏族であって、この狭屋部は遠江国の佐益郡から移住した部曲であって、遠江の佐夜部直とこの佐夜部首は同族であるとしておられる（太田亮『遠江』前出）。移住の事実をうべなうには資料が不十分であるが、両者がともに物部氏の一族を称している点は注目される。

註7 大宝令（701）年以前はコホリを郡と書かず評と書いたことが藤原宮跡の発掘によって確認されたが、ここでは叙述の繁雑化を避けてあえて郡という文字をおしなべて用いた。

註8 東寺の永和二（1376）年の文書によると、曾我莊は当時長講堂領であった。

註9 太田亮『遠江』前出

静岡県史 第2巻（1931年）

図版 第14

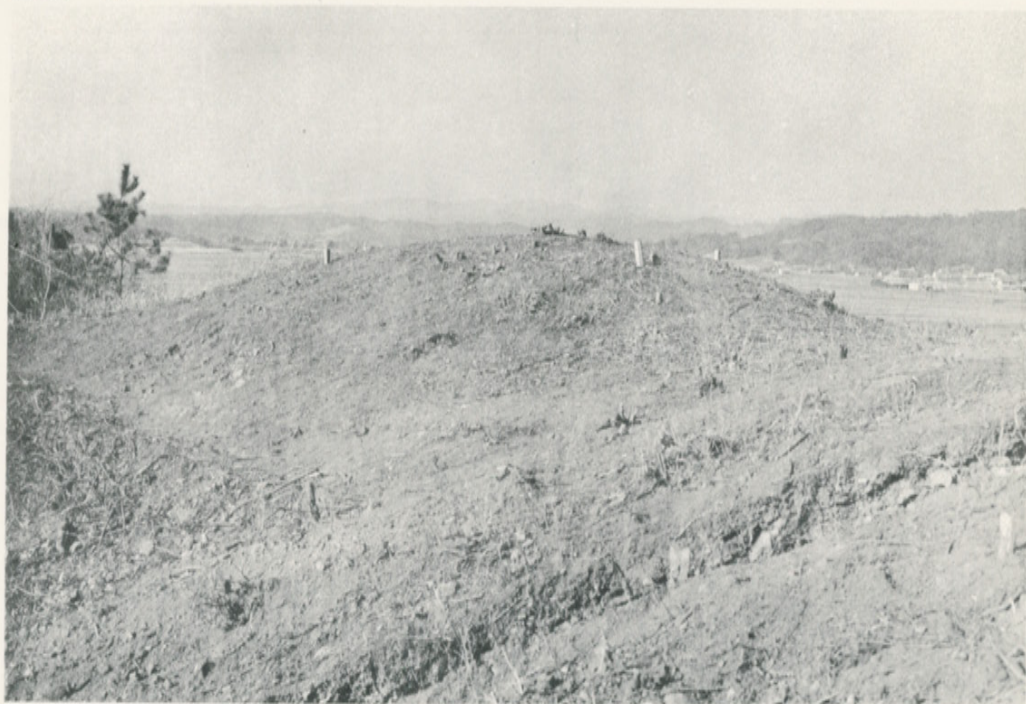


(1) 原野谷川沖積地の真中にある残丘高代山

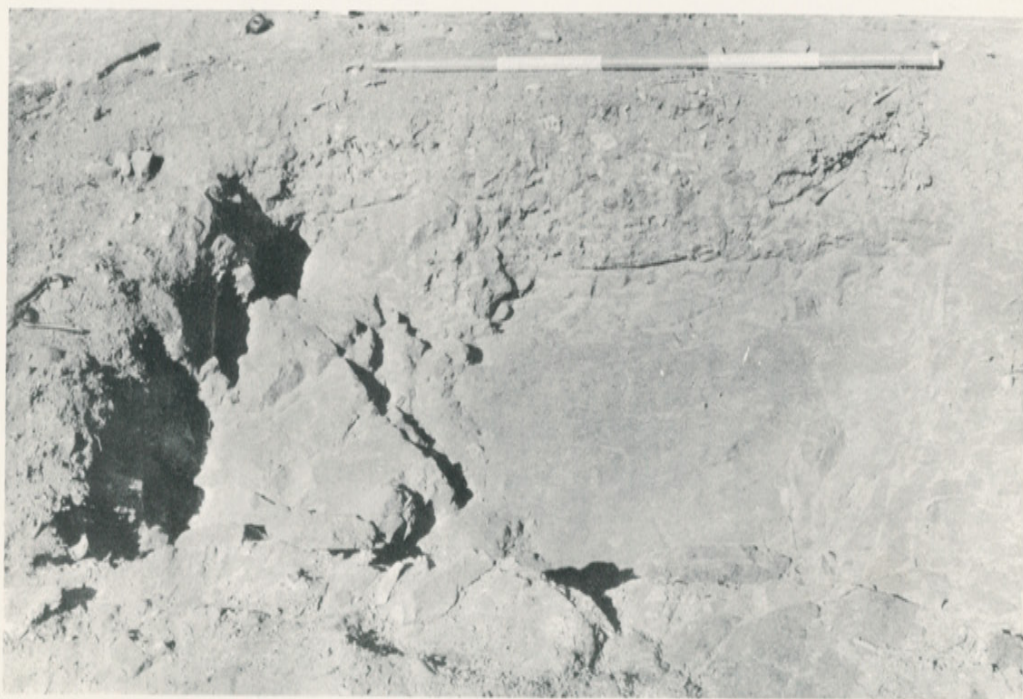


(2) 真上から見た高代山古墳群

図版 第15

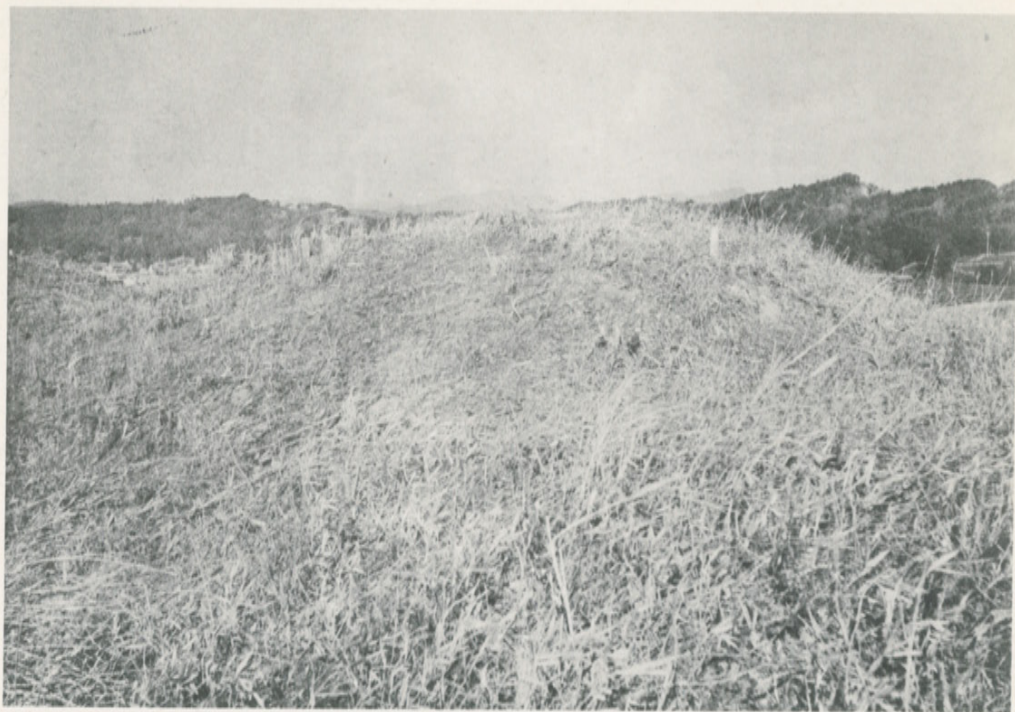


(1) 第1号墳の墳丘（西南から）

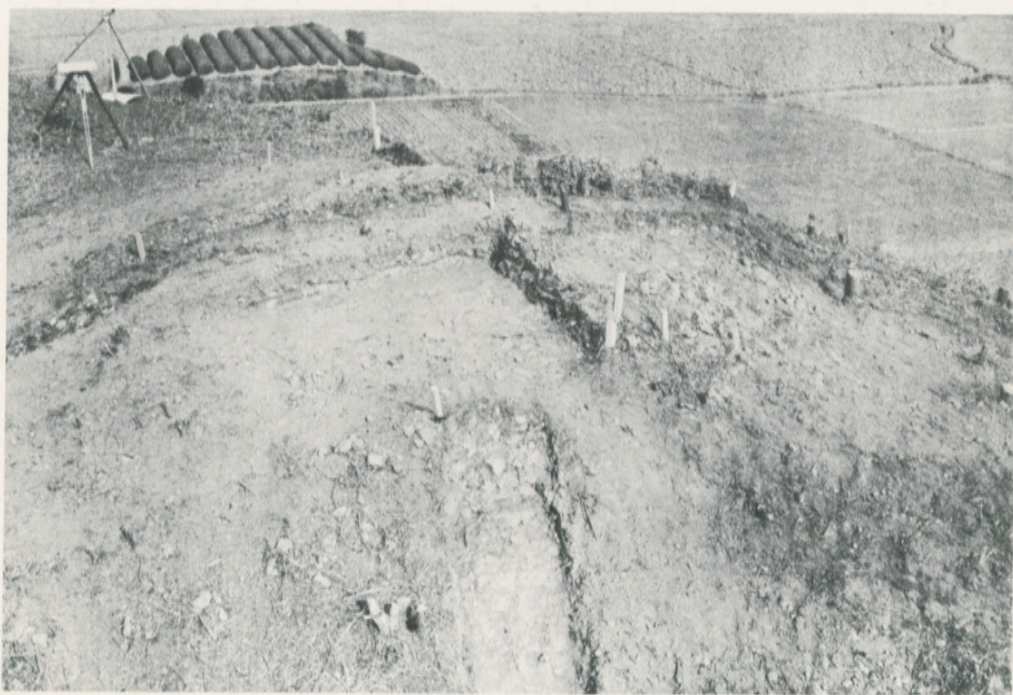


(2) 木棺を取めた岩盤の掘込

図版 第16



(1) 第2号墳の墳丘



(2) 第2号墳の発掘区



(1) 木棺を収めた岩盤の掘込



(2) 第1号墳と第2号墳との中間地点のトレンチ

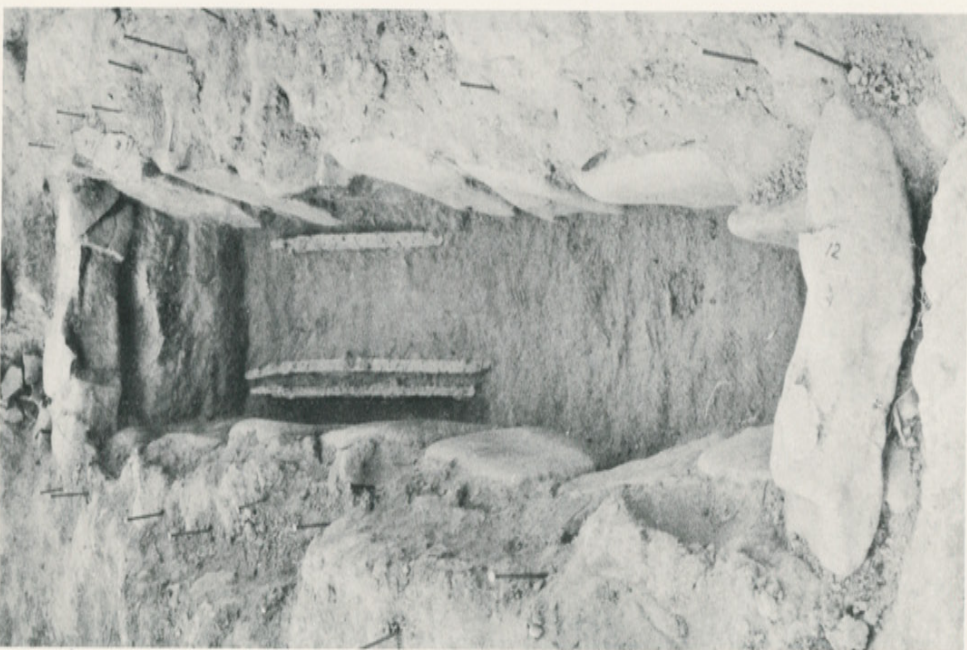
図版 第18



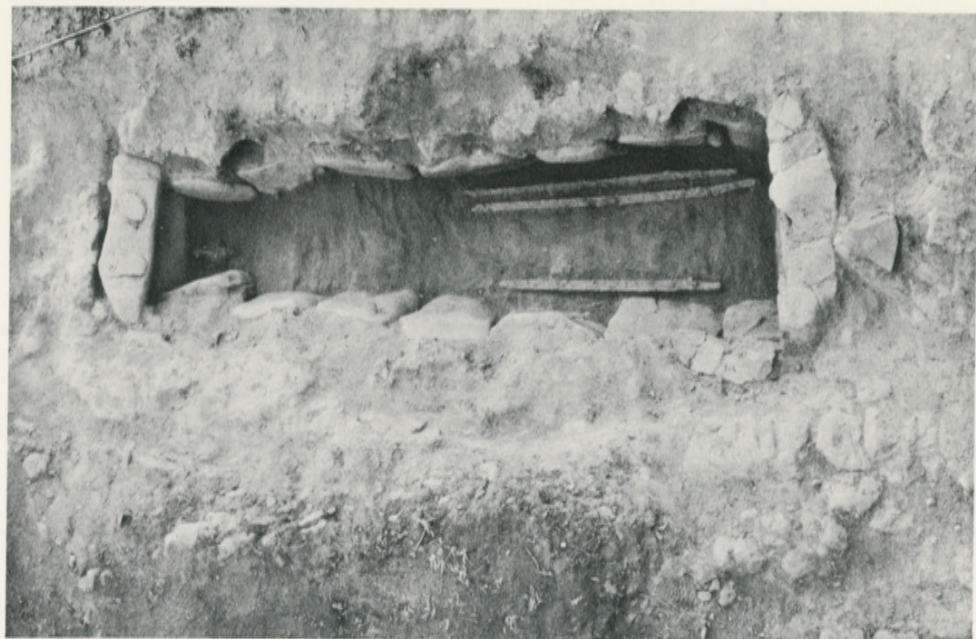
(1) 第3号墳の墳丘



(2) 石棺の蓋石の列（東から）



(1) 石棺の内部 (南から)

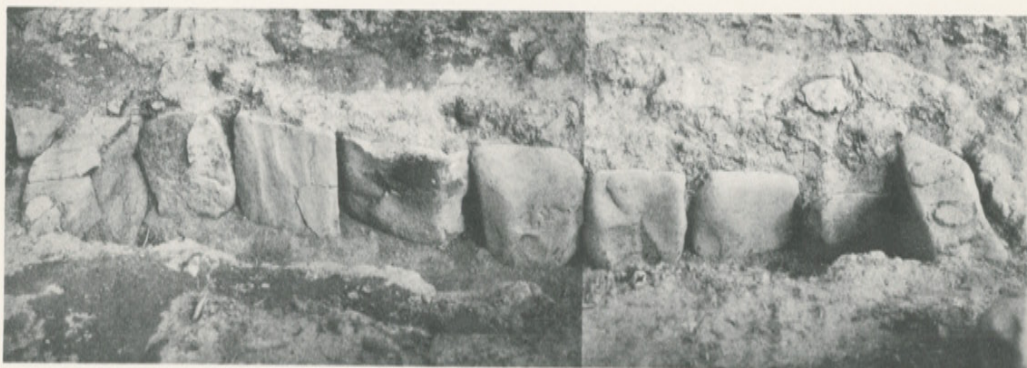


(2) 石棺の内部 (北から)

図版 第20



(1) 石棺の西側壁



(2) 石棺の東側壁

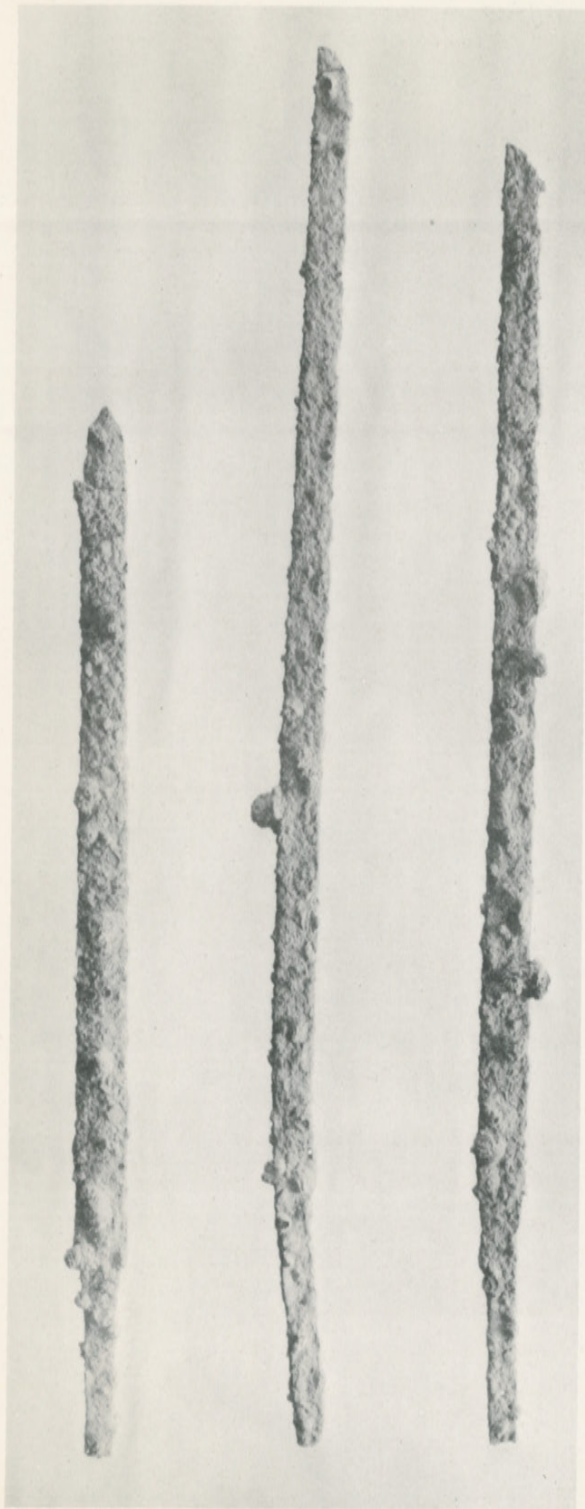


(3) 石棺の北壁

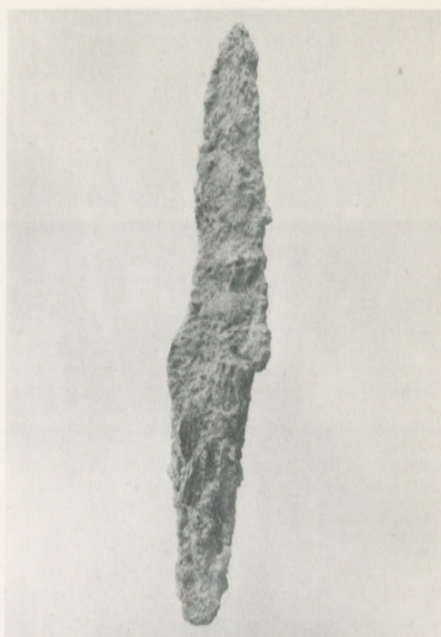


(4) 石棺の南壁

図版 第21



(1) 剣と大刀



(2) 刀子



(3) 鉄鏃

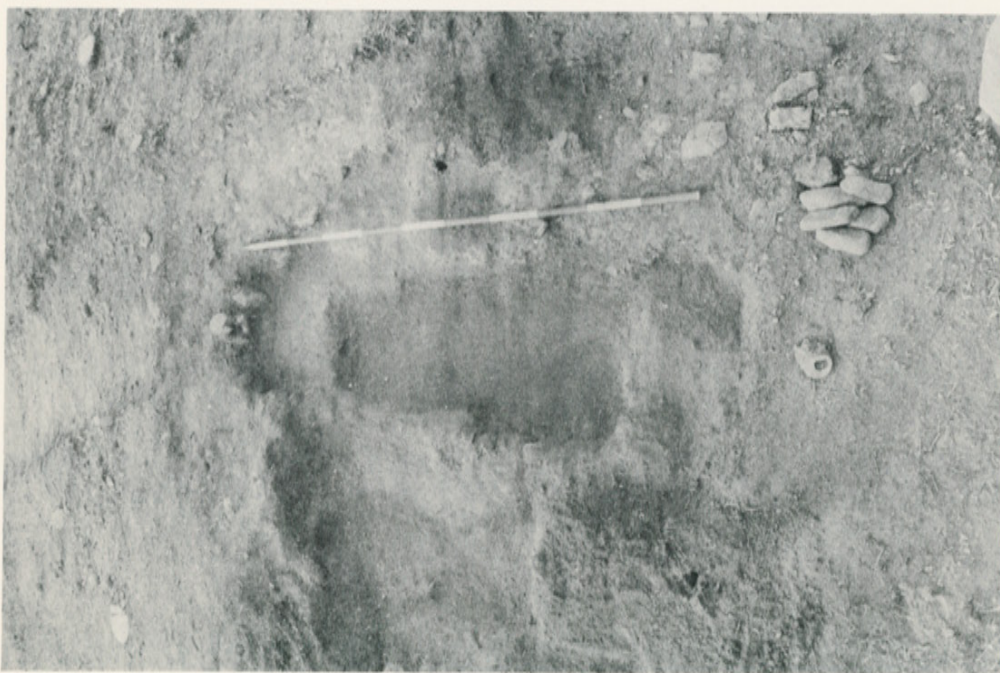
図版 第22



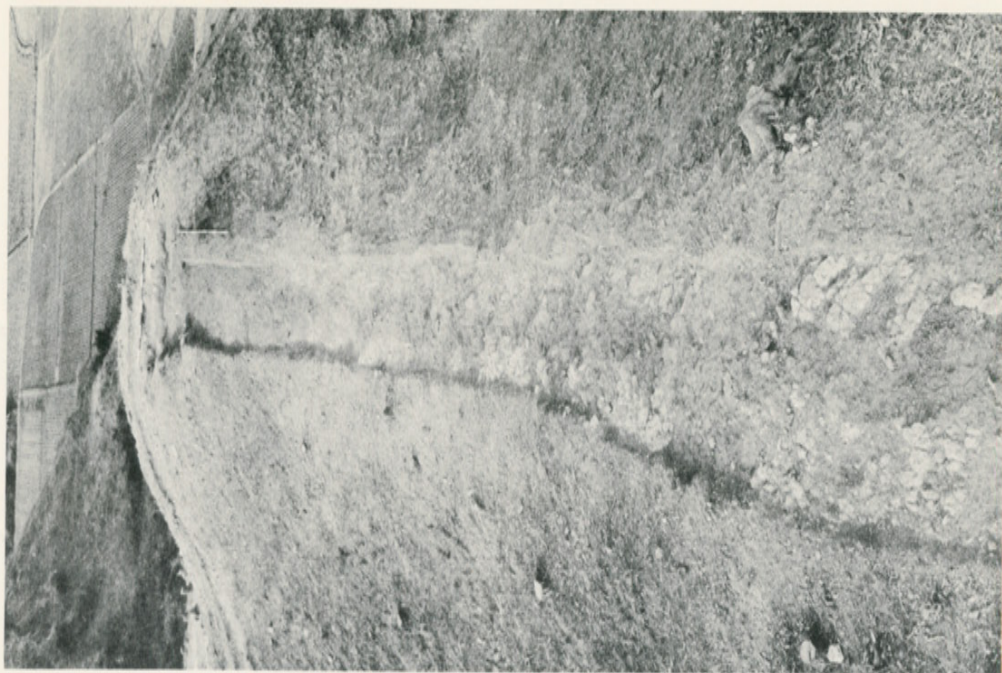
(1) 第4号墳の墳丘（西から）



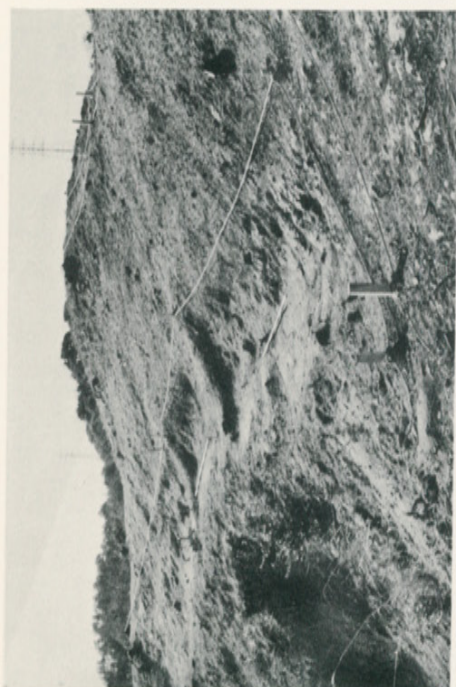
(2) 墳頂のトレンチ



(1) 後円部中央の岩盤に石棺を収める掘込 (南から)



(2) 後円部墳頂のトレンチ (南から)



(1) 墳裾の調査 (前方部東側)



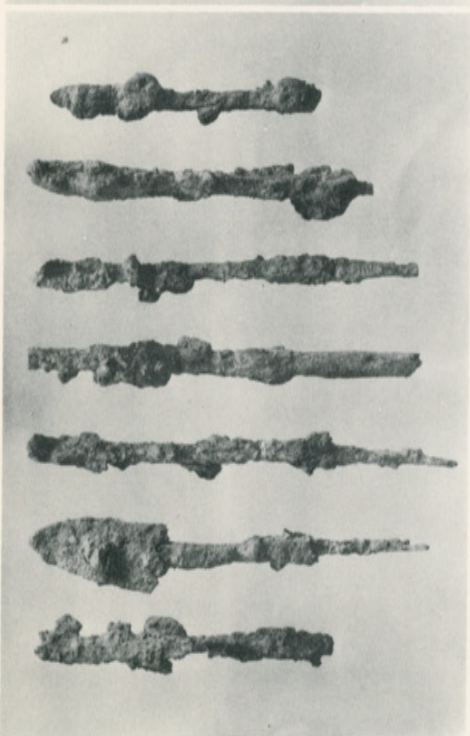
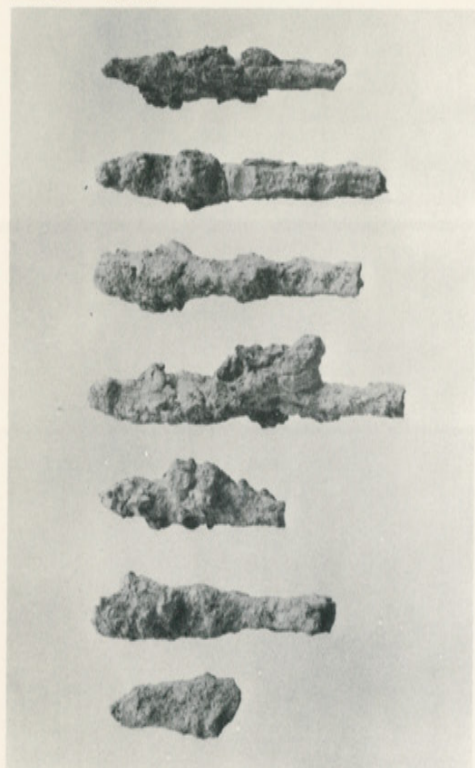
(2) 墳裾の調査 (後円部北側)



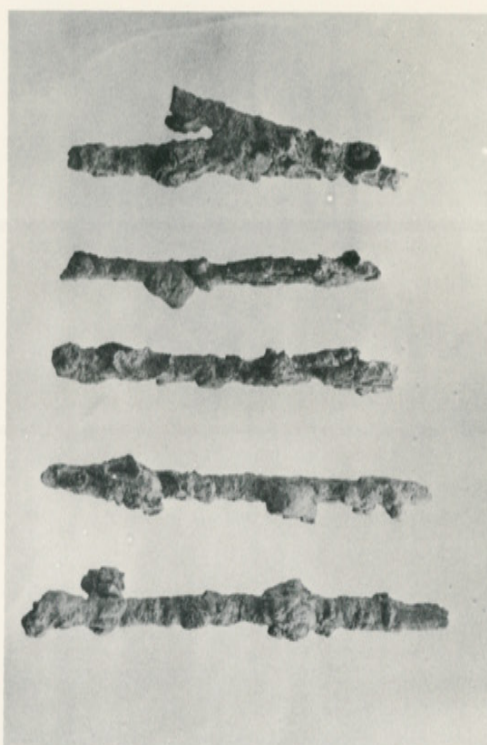
(3) 鉄鏝と石棺の残存側壁



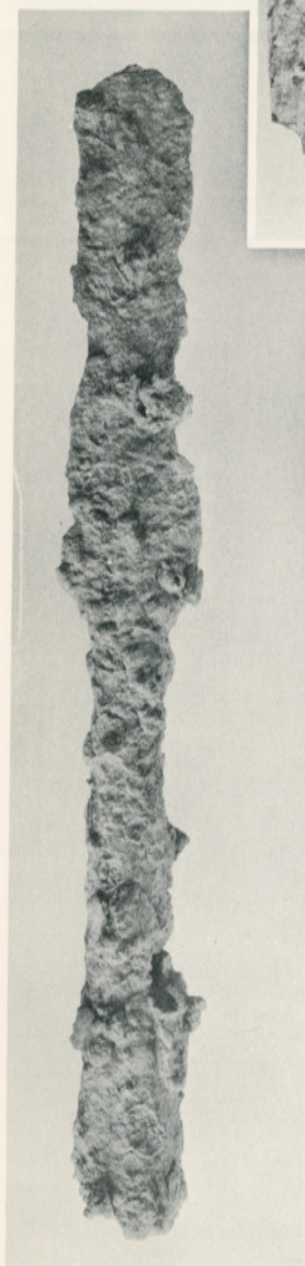
(4) 鉄鏝出土



(1) 第4号墳出土の鉄鏃



(2) 第4号墳出土の鉄鏃



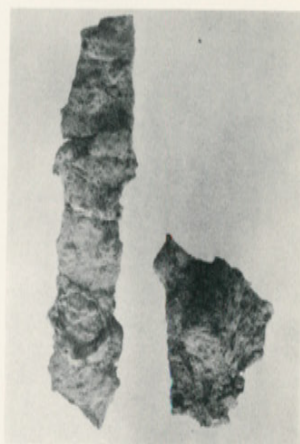
(1) 鉄 鉾



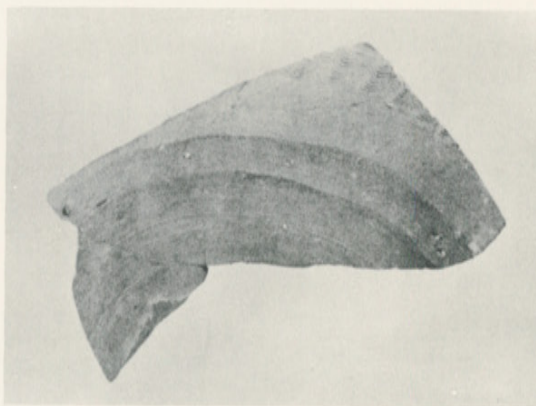
(2) 大刀と剣の残欠



(4) 鉄 針



(3) 工 具



(5) 須恵器片

図版 第27



(1) 第5号墳墳丘（南から）

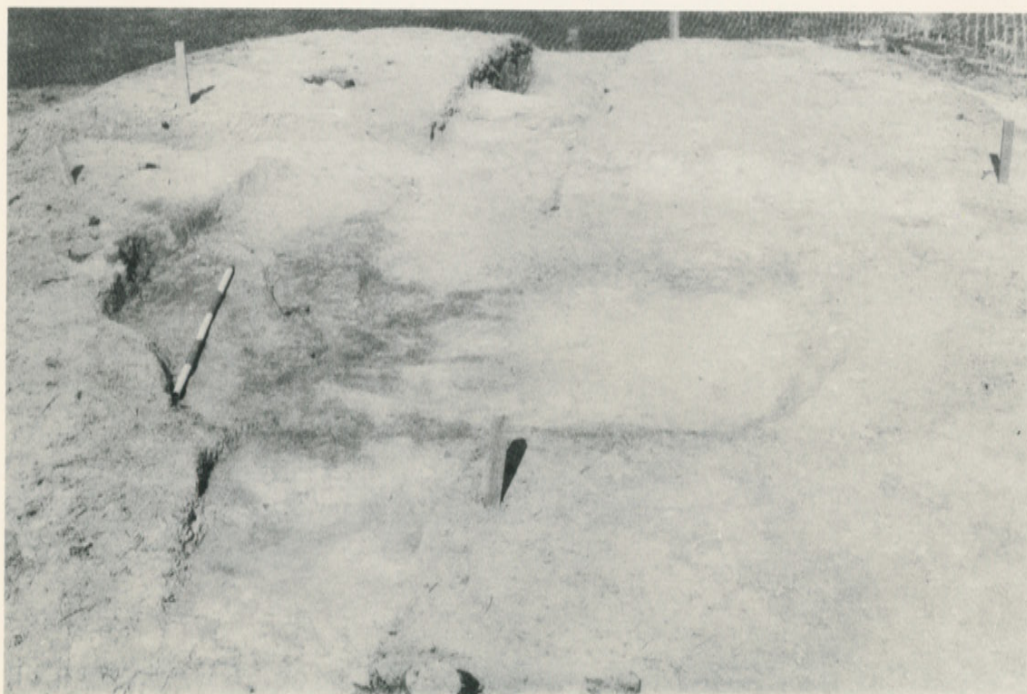


(2) 第5号墳遠影（西北から）

図版 第28



(1) 墳丘の発掘区



(2) 浅く岩盤を掘込んで木棺を据えた跡

昭和46年 3 月31日

高代山古墳群

編	集	掛川市教育委員会
発	行	掛川市教育委員会
印	刷	中部印刷株式会社

